

中学校における心に響く道徳の時間の展開

- 体験を生かした中学校第 1 学年（35時間）の学習プログラム -

「よりよく生きる力」の育成をめざし、道徳教育の充実が求められている。そのかなめとなる道徳の時間が、そうした力を育成する場となるためには、生徒が「楽しい、ためになった」と感じる心に響く学習が必要である。つまり、道徳の時間に、今までもっていた価値観を揺さぶられ、そこで自己の内面と対峙することで、より深く価値を自覚し、それをこれからの自分の生き方に反映させていこうとする態度が育成されることが重要である。

そこで、生徒が学校の教育活動の中で共有する身近な体験を道徳の内容と結びつけることで、日常生活の中から、道徳的価値の自覚を促し、実践力へと発展させることをめざした。本研究では、その年間計画と学習プログラムを提示し、実証授業を通して、その有効性を明らかにするとともに、今後の課題を検討する。

目 次

はじめに	1	第3章 実証授業の分析と考察	
第1章 道徳の時間のめざすもの		第1節 ユニット「文化祭」	
第1節 道徳の時間の現状と課題		(1) ユニット「文化祭」のねらいと	
(1) 道徳の時間に求められているもの	1	展開の流れ	20
(2) 道徳の時間の現状	2	(2) ユニット「文化祭」の分析と考察	22
第2節 体験を生かした道徳の時間の在り方		第2節 ユニット「人権学習」	
(1) 体験を道徳の時間に生かす意義	4	(1) ユニット「人権学習」のねらいと	
(2) 生かすべき体験とは	6	展開の流れ	25
第2章 道徳の時間の学習プログラムの開		(2) ユニット「人権学習」の分析と	
発と展開		考察	27
第1節 学習プログラムの開発に向けて		おわりに	32
(1) 道徳の内容項目の整理と分析	8		
(2) 体験と内容項目との関連	11		
第2節 学習プログラムの展開			
(1) 体験と道徳を結びつけたユニットの			
構成とそのねらい	13		
(2) 体験を生かした35時間の			
道徳の時間の学習プログラム	15		

< 研究担当 > 石居 知 予 子 (京都市立永松記念教育センター研究課研究員)

< 研究指導 > 外 川 正 明 (京都市立永松記念教育センター研究課指導主事)

< 研究協力校 > 京都市立陶化中学校
京都市立久世中学校

< 研究協力員 > 雑 賀 太 郎 (京都市立陶化中学校教諭)
天 谷 千 恵 (京都市立久世中学校教諭)

はじめに

新学習指導要領の本格実施を来年度に控え、京都市では、その移行期間の最終年度である本年度の「指導の重点」として、「心の教育」の充実を第一に挙げている。その中で道徳教育が果たすべきものとして「心の教育の中心的役割を担う道徳教育は、人格形成の基盤となる道徳性の育成を目指すものであり、教育活動全体を通して、一層の充実を図る必要がある。そのため、道徳教育の『かなめ』としての道徳の時間においては、各教科等との関連や家庭、地域社会との連携を図りながら、体験活動等を生かした多様な取組の工夫に努め、子どもたちが人間としてよりよく生きていく道徳的実践力の育成を目指す計画的・発展的な指導を展開する」と述べている。(1)

この中で述べられているように、道徳の時間が生徒にとって「人間としてよりよく生きていく道徳的実践力の育成」の場となるためには、まず「楽しい、ためになった」と感じる心ができる心に響く道徳の時間でなくてはならない。

そこで、生徒の体験を生かし、生徒の内面に根ざした、生徒の心に響く道徳の時間を展開することが重要になるのである。このことは、教育課程審議会の答申の中の道徳教育の「改善の基本方針」の一つに「体験活動等を生かした心に響く道徳教育の実施」(2)が挙げられていることから明らかである。

しかし、とにかく体験をさせればよいというような、体験を重視することだけが先走ることには、注意する必要がある。確かに、生きていく上で必要な体験が、不足しているために、困難な場面に遭遇したとき、どのような行動をとればいいのかかわからず、社会生活に不応を起す生徒がいることが社会的に問題にされている。だからといって、体験を与えれば、問題解決が図られるというのでは短絡的すぎるのではないだろうか。体験の数を増やすことに重きをおくのではなく、体験を自分の生き方にどのようにして生かすのかが大切なのである。

体験は日常の学校生活の中にいくらでもある。まずは、その体験を生かして、道徳の時間に実感をもって自分の生き方と対峙させ、生徒に道徳的価値を獲得させていくことから始めるべきであると考えた。そのように獲得された価値観は、今後の生徒の生活に実践として生かされていくはずである。

体験を生かした道徳教育でのある実践において「子どもたちには、体験をさせるだけでは不十分である。また、日常の様々な体験も、そのままにしておく、日がたつと共に記憶も薄れていく。授業の中で、体験をより意義のあるものに高め、次なる体験に生きて働くような手立てが必要となってくる」(3)という生の声がある。つまり、その手立てが道徳の時間に求められているのである。

そこで、本研究は、生徒が学校の教育活動の中で共有する身近な体験を道徳の内容と結びつけることで、日常生活の中から、道徳的価値の自覚を促し、実践力へと発展させることをめざした年間計画と具体的な学習プログラムを開発し、実証授業を通して、その有効性を明らかにするものである。

第1章 道徳の時間のめざすもの

第1節 道徳の時間の現状と課題

(1) 道徳の時間に求められているもの

平成10年度に新しい学習指導要領が告示された。今回の改訂では、道徳教育の充実を図る観点から、道徳教育の目標が総則の中に掲げられているが、その背景には何があるのだろうか。

昭和33年に道徳の時間が特設されて以来、道徳教育の充実が図られてきた。また、今回の学習指導要領の改訂においては、学校完全週五日制を視野に入れ、各教科の授業時数の削減が実施される中、道徳の時間については現行の35時間という時数が確保されている。そこには、現代の子どもたちが置かれている状況が大きくかわっていると思われる。

中学生という時期は、一般的に自らの進路や将来についての関心が高まり、自分の人生をよりよく生きたいという内からの願いが強くなる時期であると同時に、思春期という心身ともに変化の激しい不安定な時期でもある。このような時期にある生徒が現代社会の急速な都市化・情報化の中で自己を見失い、無気力になったり問題行動に走ったりする例も少なくない。

心身の成長がアンバランスな状態にある生徒は、精神的に不安定になることが多い。そういう精神的に不安定な時期の生徒が複雑な社会の中で、自分を客観的・冷静に見つめることができずに自己を見失うことがある。また、他者とのか

かわりが希薄になっている社会の中で、自分の悩みや不安を自分だけで抱え込み、解決できずに、非社会的や反社会的な行動に走ることもある。さらに、表面的には心身とも順調に成長していると思われる生徒でも、この思春期という自我が確立していく時期においては、常に自分の将来のことに対する不安がついてまわったり、自分と他人を必要以上に比較したりするなど、悩みや心の揺れや葛藤がある。

このような不安定な時期にある生徒が複雑な社会の中で生きるためには、どのような力が必要で、そのために道德の時間に求められるものは何なのであろうか。

金井肇はその著書の中で、「道德は一人一人のよりよい生き方の根本にかかわるものであり、道德教育はその実現を目指して行われるものである」(4)と述べている。そして、「子どもたちはよりよい生き方を切実に求めている。この願いにこたえるように指導することが、道德教育を実りあるものにするための基本的な着眼点である。」(5)とも述べている。

つまり、人間として生きていく上で、自分がかけがえない一人の人間として大切にされ、頼りにされていることを実感でき、存在感と自己実現の喜びを味わえる生き方ができる力が必要であり、人間としてよりよく生きていく道德的实践力を育成していくことが道德教育、そして、そのかなめとなる道德の時間に求められているのである。

「よりよく生きる力」は、もちろん道德の時間だけで身につくわけではない。「よりよく生きる力」は、家庭、学校、地域社会という生徒を取り巻くすべての環境の中で育成されるものであるが、とりわけ、教育的意図のもとに、計画的・発展的に行われる学校の教育活動が担う役割は大きいと思われる。その中でも、道德の時間は学校教育の各教育活動（各教科・特別活動・総合的な学習の時間・日常生活）における道德教育のかなめとして、重要なのである。

そこで、「よりよく生きる力」の育成に向けて、道德の時間がその他の教育活動のかなめとなるために、これらの各教育活動がどのように関連しているのか、またその中で道德の時間が担っている役割は何なのかということについて、明らかにしておく必要があると思われる。

道德の時間とその他の教育活動との関連について、押谷由夫がその著書の中で述べていることを要約すると、「道德教育のかなめである道德の時間

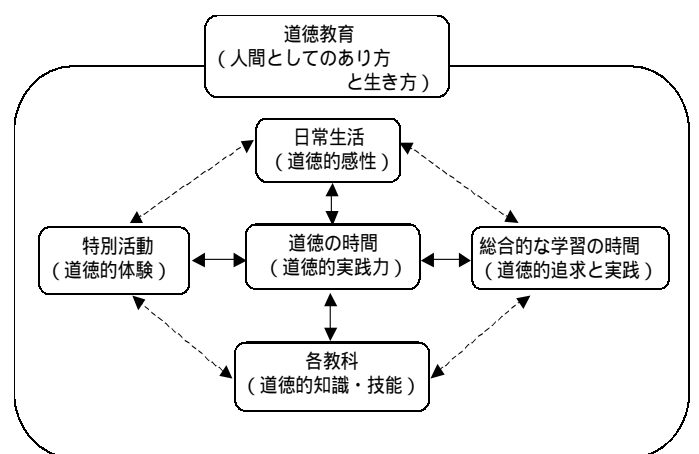
においては、道德的实践力を培っていく。特別活動では、道德的体験を充実させる。総合的な学習の時間においては、道德的探求と実践を重視する。各教科においては、道德的知識や技能を身につける。日常生活では、道德的感性を育む。」(6)として、図1-1(7)のような構造を示している。つまり、学校教育の中で、それぞれの特質を生かしながら道德的实践力の育成をめざしているというのである。また、押谷は「これらはあくまでも力点であり、それらが相互に混ざり合って、学校全体における道德教育がなされることは、言うまでもない」(8)とも述べている。

このことからわかるように、各教科・特別活動・総合的な学習の時間・日常生活の中で培われた道德的实践力の素地が道德の時間で補充、深化、統合され、道德の時間に道德的価値の自覚に裏打ちされることによって、道德的实践力の育成に結びつくと考えられる。

ここで言う「道德的価値の自覚に裏打ちされる」とは、道德的価値を自分とのかかわりで捉え、自己の内面で深く自覚し、他の人の考えを知ることを通して自分なりに発展させ、自分の生き方に結びつけるということである。

つまり、教育活動の中で培われた生徒の「よりよく生きる」ことに関する素地が、道德の時間に道德的価値の自覚に裏打ちされたとき、「よりよく生きる力」に結びつくと考えたのである。

図1-1 学校の各教育活動における
道德教育の主な力点



押谷由夫『新しい道德教育の理念と方法』
東洋館出版社、1999年1月、p. 37

(2) 道德の時間の現状

道德の時間が「よりよく生きる力」の育成の時間となるためには、道德の時間が生徒にとって充

実したものでなくてはならない。そのために、まず生徒と指導者が道徳の時間に何を求めているのかを把握する必要がある。そこで、道徳の時間を生徒がどのように感じ、学校教育の中でどのような状況にあるのかを考察した上で、道徳の時間の充実にとって何が求められているのか考えてみることにする。

平成10年度に文部省によって実施された「道徳教育推進状況調査」によると、「道徳の時間に対する生徒の受け止め方」は、表1-1(9)でわかるように、「ほぼ全員」又は「3分の2くらい」の生徒が道徳の時間を「楽しいあるいはためになったと感じている」とする学校は、第1学年で43.8%、第2学年で31.2%、第3学年で28.8%となっており、学年が上がるにつれて、その数字は低くなっていくことがわかる。

表1-1 道徳の時間の評価(単位%)
(道徳の時間を「楽しいあるいはためになったと感じている」生徒の学校ごとの割合)

区分		ほぼ全員	3分の2くらい	半分くらい	3分の1くらい	ほとんどいない
中学校	第1学年	8.2	35.7	39.8	15.2	1.2
	第2学年	5.1	26.1	44.1	22.8	1.8
	第3学年	4.9	23.9	41.1	27.0	3.1

(『初等教育資料』文部省小学校課編集平成12年8月号)

そこで、なぜ、学年が上がると、道徳の時間を「楽しい、ためになった」と感じる生徒が減っていくのかまた、どのようなときに「楽しい」と感じたり、「楽しくない」と感じたりするのかを及川秀樹が平成7年度に実施した調査結果から考察してみたい。(表1-2)(10)(表1-3)(11)

この調査によると、「楽しい」と感じる理由として、「今まで気づかなかった大切なことに気づいたり、感動したりすることができるから」「自分の体験と重ね合わせて考えてみたり、自分だけではなく他の人もそうなんだなあと感じたりすることが多いから」などが挙がってきている。また「楽しくない」と感じる理由として「いつも同じような授業だから」「資料の内容がつまらないから」「考えを押しつけられたりお説教に聞こえてしまうことが多いから」「わかりきったことしかないので、感動したり深く考えたりすることが少ないから」といった回答が多かった。

表1-2 道徳の時間を楽しみと感じる理由(単位%)

	中学校		
	1年生	2年生	3年生
いろいろな友達の意見や考え方が聞けるから	31.2	23.6	23.5
今まで気づかなかった大切なことに気づいたり、感動したりすることができるから	37.2	32.1	34.3
自分のしっかりした考え方がもてるようになるから	20.2	15.9	15.5
自分の知りたいことや求めていることが学べるから	11.2	10.8	9.6
自分の体験と重ね合わせて考えてみたり、自分だけではなく他の人もそうなんだなあと感じたりすることが多いから	34.6	31.2	38.2
自分の生活や生き方について考えることができるから	17.8	19.5	17.7
資料が、興味深く、心をうつものが多いから	23.0	26.4	32.3
いろいろな方法で楽しく授業をしてくれるから	33.1	24.9	18.5
先生が一生懸命真剣に指導してくれるから	11.0	6.6	6.1
その他	3.8	4.3	3.0

(『道徳教育』明治図書、1997年4月号臨時増刊)

表1-3 道徳の授業を楽しみと感じない理由(単位%)

	中学校		
	1年生	2年生	3年生
友達の意見を聞いてもあまり役に立たないから	11.9	10.4	10.2
わかりきったことしかないので感動したり深く考えたりすることが少ないから	24.0	20.6	22.7
考えを押しつけられたり、お説教に聞こえてしまうことが多いから	30.6	26.3	27.1
自分が本当に知りたいことや求めていることが学べないから	20.2	18.2	16.2
自分には関係ない話だと思ってしまうから	20.0	19.5	16.8
自分の生活や生き方を考えることができないから	8.1	7.2	5.4
資料の内容がつまらないから	26.4	32.1	32.1
いつも同じような授業だから	49.4	54.4	53.2
その他	9.0	7.7	6.6

(『道徳教育』明治図書、1997年4月号臨時増刊)

これらのアンケート結果から、生徒が道徳の時間を楽しみと感じるのは、資料に感動したり、自分の体験と重なったりして、心が動くことにより深く自分の内面と対話し、新たな気づきのあるとき、つまり、自分の心に受け止めるものがある場合だということがわかる。わかりきったことをくどくど言われるタテマエの道徳の時間や自分に関

係のないことだと感じる道德の時間は生徒にとっては楽しくないのである。このことは、子どもの発達段階と関係があるのではないと思われる。

田中純夫は、中学生を含む青年期は、「既存の社会体制や価値体系に挑んでは跳ね返されながら自己を確立し、社会の権威性を内面に取り入れていく過程が含まれている」(12)と述べている。たとえば、学校の規則について考えてみると、「学校の規則は守るべきもの」と考えていた子どもが、ある時期にくると、「なぜその規則を守らなければならないのか」を考え始める。そして、自分の納得のいかない規則については反発し、また、守る必要を感じていても、友達関係を優先して守らなかったり、自分を規制するものに対して、むやみに反抗したりする。子どもはこういう過程を歩みながら大人へと成長するのである。この時期に当たるのが中学生の時期なのである。

この時期にある中学生が、心を動かされるような新たな気づきのないままのタテマエの道德の授業では「楽しかった、ためになった」と感じないのは当然である。生徒は、今まで自分が生きてきた経験から、よいこと、悪いことの判断はできる。また、望ましい人間関係がどのようなものであるのかは、理屈では理解している。しかし、よいと分かっていながら、できないことがある。うまく、人間関係がもてないことがある。それが、なぜかを知りたいのである。

つまり、生徒が道德の時間に求めているものは、自分が社会でどのようにして生きていくべきかを教えてくれたり、自分の抱えている悩みや苦しみは自分だけではないという安堵感を与えてくれたりする、自分の心に受け止めるものの存在である。道德の時間にこのような欲求が満たされたとき、生徒は道德の時間が「楽しい」「ためになった」と感じるのだと思われる。

一方、指導者が道德の時間に求めているものも、どのようにしたら生徒が心に受け止める時間にできるのかという答えである。今、道德の時間に必要なものは生徒が心に受け止める時間を、すなわち生徒の心に響く道德の時間を、どのようにして生み出していくのかということなのである。

第2節 体験を生かした道德の時間の在り方

(1) 体験を道德の時間に生かす意義

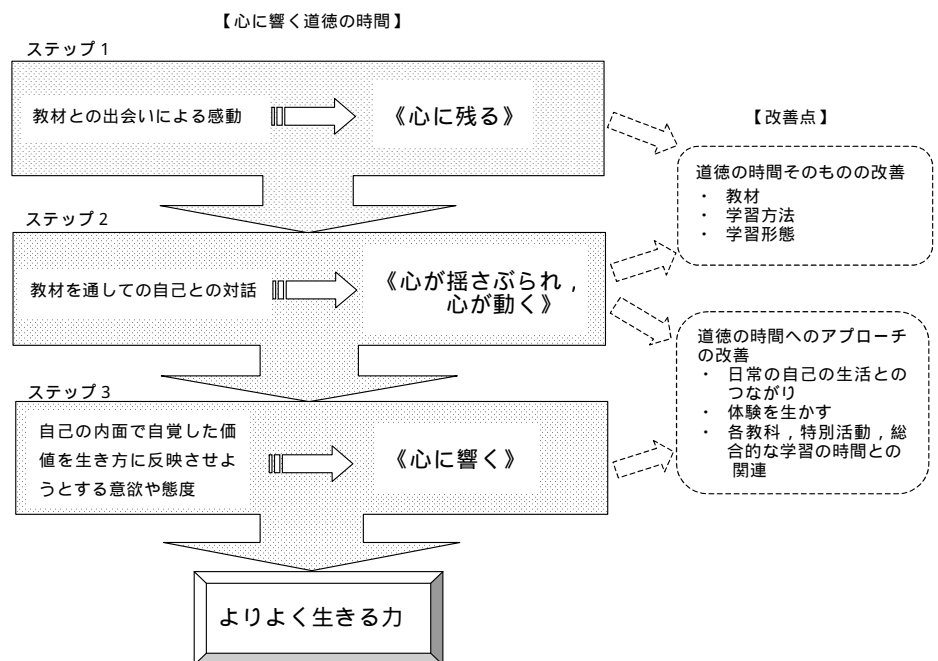
では、「よりよく生きる力」の育成をめざして、道德の時間が生徒にとって「楽しい、ためになった」と感じる心ができる心に響く時間となるためには、具体的に道德の時間をどのようにしていけばいいのだろうか。

すでに知っていることを何回聞いても、心に響く道德の時間とはならない。心に響く時間となるには、図1-2で示すように、まず、その時間に教材と出会い、感動することで「心に残る」時間となることから始まる。そして、教材を通して、これまで自分がもっていた価値観が揺さぶられたり、他の人の考えを聞いたりすることで、自己の内面と対話し、「心が動き」、深く価値を自覚する。さらに、このような過程を踏んだ価値観を、自分の生き方に反映させていこうとする意欲や態度が育ったとき、「心に響く」道德の時間となり、「よりよく生きる力」の育成につながるのである。

そこで、道德の時間を心に響く時間とするために改善を図るとき、道德の時間そのものの改善と、道德の時間へのアプローチの改善という二つの面が考えられる。

図1-2に示しているように、教材や学習方法や学習形態などの道德の時間そのものの改善は、道德の時間が「心に残る」ことと、道德の時間に「心が揺さぶられ、心が動く」ことを深めることにつながると考えられる。

図1-2 心に響く道德の時間と改善点



たとえば、日常とのつながりを視野に入れながら、生徒の興味・関心を引き出す読み物資料を使ったり、慣れ親しんでいるテレビやCDなどの視聴覚教材を用いたり、ワークシートを工夫したりするなどの教材の改善は、道徳の時間に対する生徒の固定したイメージに変化を与え、展開において、多面的な思考を導き出すための導入に有効である。また、生徒の感性を刺激するようなインパクトのある資料を使うことは、生徒の今までの価値を揺さぶることにつながると思われる。

また、ロールプレイや、グループエンカウンターや、フォトランゲージの手法を用いるなどの学習方法の改善は、今までとは異なる面から価値に迫ることができ、自分の内面をさまざまな方向から見つめる契機となるであろう。

さらに、学年道徳や保護者・地域の人の参加や、チームティーチングなどの学習形態の改善でも、道徳の時間に対する固定したイメージを払拭することや、さまざまな人の意見を聞くことができることで、さらに内面での対話が深まることを期待できる。

一方、道徳の時間へのアプローチの改善は、道徳の時間に「心が揺さぶられ、心が動く」ことと、道徳の時間が「心に響く」ことに深く関係すると考えられる。

つまり、日常の自己の生活とのつながりを生かした道徳の時間や、体験を生かした道徳の時間、各教科や特別活動や総合的な学習の時間などの教育活動と連携した道徳の時間などは、道徳の時間で深めようとしている価値を自分のこととして実感することにつながり、これからの生き方に結びついていくことにおいて、重要であるだろう。

ところで、生徒が道徳の時間を「楽しい、ためになった」と感じるためには、指導者がどうすればよいのかと考えるとき、どうしても道徳の時間そのものを改善して生徒に授業そのものへのインパクトを強め、心に残る授業にしようと考えることが多い。しかし、前述したように、心に残ることだけでは、心に響くことにはならない。今まで経験したことのないような授業で生徒の心に残ったとしても、自己との対話により自覚した道徳的価値を自分の生き方に反映させていこうとする意欲や態度が育たなければ、心に響いたとはいえず、その授業はその場限りのイベントに過ぎないものになってしまうのではないだろうか。

もちろん、授業そのものの改善は、道徳の時間が心に残ったり、その時間に心が揺さぶられたり、動かされたりすることにおいては、重要であると

思われる。しかし、これだけでは、自覚した価値が心に響き、生徒の生き方に反映することにはつながらず、「よりよく生きる力」の育成には発展しないのではないだろうか。つまり、道徳の時間で取り上げた道徳的価値が日常の生活に結びついて初めて、道徳的実践力の育成が図られるということが基盤になくしてはならないのである。

このように、道徳の時間そのものの改善と、道徳の時間へのアプローチの改善は、どちらか一方に力を入れただけでは、「心に響く」道徳の時間になることはなく、双方を改善の視点として、道徳の時間の開発にあたることが大切であると考えた。

そこで、今回の研究では、道徳の時間そのものの改善と、アプローチの改善の二つの面から、体験を生かした道徳の時間を開発することにした。

シュブランガー（ドイツ、1882~1963）の言葉に『他人の心の動きは自分の体験に照らしてしか理解できない』とあるように、道徳の時間にどのような資料を使うにしても、生徒は自分の体験に照らし合わせて、その資料を理解し、思考判断し、行動しようとする。

たとえば「思いやり」をねらいとした道徳の時間を考えてみる。すると、思いやりの心が大切だということはわざわざ道徳の時間に言わなくても生徒は知っている。そのようなことを指導者が何度言っても、生徒の心に響くことはない。しかし、生徒は、今までの自分の体験から、困っている人がいても、知らない顔をしてしまうことがあること、頭では分かっている、そのときの自分のおかれた状況によって、自分の思いが行動に表せないことがあることを知っている。また、人間関係から、どうしても相手に「思いやり」の心が沸いてこないことがあることも自分の体験から実感している。

そこで「なぜ、よいと思いつながらもできないのだろうか」「なぜ、悪いと知りながら、そのような行為を行ってしまうのだろうか」というところを自分の体験を通して深く掘り下げていくことによって、生徒は「思いやり」という価値を自分のこととして捉え、自分を振り返り、自己の内面と対話することになる。そして、このようにして、心が揺さぶられ動き、さらには、自己の内面で自覚した価値観が、自分の生き方に反映されたとき、心に響く道徳の時間となるのである。このとき、生徒は道徳の時間を「楽しい、ためになった」と捉えるのである。

つまり、道徳の時間において、価値の自覚を深

め、それを生徒の生活と結びつけ、実践力の育成を図るためには、いかにしてその時間の中で生徒の体験したことを生かし、価値を自分のこととして実感させ心に響く時間とするかが重要だと思われる。そこで、道徳の時間で学んだことが、単に知識だけで終わるのではなく、生徒が体験したことを通して自己の内面と対話し、そこで得られた価値を、これからの生き方に反映させていこうとする意欲や、態度を育成することをめざした。そうすることによって、道徳の時間が心に響く時間となり、その時間で培われた道徳的実践力が日常生活の中で道徳的実践に結びつくのではないかと考えたのである。

(2) 生かすべき体験とは

前項で、心に響く道徳の時間にするために、体験を生かすことが大切であることを述べたが、それでは次に、道徳の時間に「生かすべき体験」とはどのようなものかを考えていきたい。

もちろん、生徒にとって、日々の生活すべてが体験である。生徒はこの世に誕生して今に至るまでに家庭や学校や地域社会でさまざまな体験をして成長してきた。しかし、もちろんその体験は生徒によって異なっている。

それぞれの生徒がそれぞれの場所で体験したことを道徳の時間に生かすことも大切である。しかし、道徳の時間に生徒のそれぞれ異なった体験から道徳的価値を深めていくよりも、同じ時間に同じ場所で共有した体験をもとに、他の人の意見を聞いたり、お互いの意見を交換しあったりする方が、より価値が高められたり、深められたりすると思われる。体験を道徳の時間に生かすことを主に考えるならば、それは、生徒にとって共有できる学校教育での体験が望ましいと考えた。

学校の教育活動には、各教科・特別活動・道徳の各領域と、総合的な学習の時間やこれらの授業以外の朝や帰りの学級の時間、休憩、給食、清掃、放課後、部活動の時間などの日常生活がある。そして、これらの学校教育での体験は、すべてが教育的意図をもった体験を組み込んだ活動であることから、体験活動と捉えられる。この体験活動が生徒にとって共有する体験であり、それを生かして道徳の時間に生徒に価値の自覚を促すのである。

また、体験を生かした道徳の時間は、道徳の時間の充実だけでなく、体験そのものも発展したものにす。道徳の時間がどのような働きをすることが体験の充実に結びつくのかについて、「体験」

と「経験」との関連から述べておく。

「経験を積む」とはいても、「体験を積む」とはいわない。つまり、「経験」は積み重なっていく活動であり、「体験」はその場だけの活動であるといえるのではないか。しかし、「体験」も「経験」として積み重ねることはできるし、むしろ「体験」を「経験」としていくことが大切だと思われる。

このことを梶田叡一は、その著書の中で「主我が行なう意識的無意識的な活動とそこでの諸体験のうち、主我の側になんらかの形で残され、意味づけられ、蓄積され、利用されるものが経験と言ってよい。したがって、主我の活動や体験のすべてが経験として残っていくわけではない」(13)と述べている。また、体験の経験化について「自己意識のうちで重要な一部が記憶され、関連する活動や体験の記憶や意味づけ等がそれを核として組織されるといって自己概念が成立していくものと考えられるが、この段階に至ってはじめて活動や体験が経験化されたということになるであろう」(14)と述べている。そして、学校教育においては、生徒が、体験それ自体から少し身を離して、その体験が自分に与えてくれるものを吟味・確認していき、体験を経験化する役割を道徳の時間に求めているのである。(15)

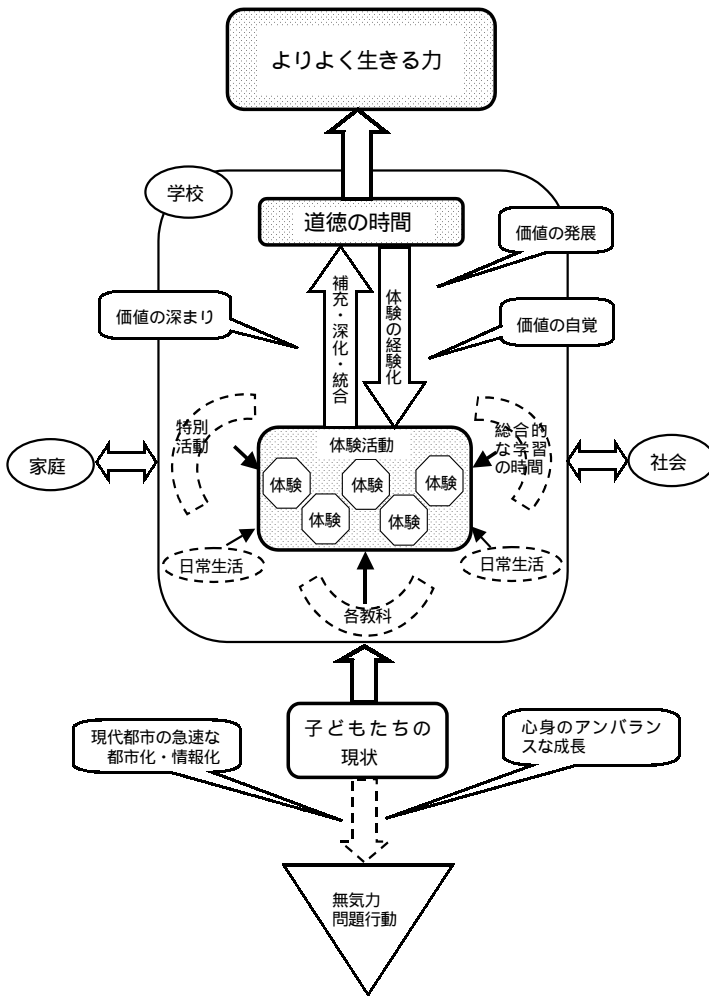
つまり、学校の教育活動の中のさまざまな体験を、その場限りのもので終わらせるのではなく、体験で実感した価値を道徳の時間で、補充、深化、統合することによって、より内面で自覚し、それを、これからの生き方につなげていくのである。そして、そのとき初めて、体験は、意味ある経験として、生徒に蓄積されていくと考えられるのである。

最後に、「体験を生かした道徳の時間」という場合の、体験と道徳の時間の関連について『中学校新道徳授業の基本用語辞典』を引用して、確認しておきたいと思う。ここで、「体験活動は道徳教育上、大別して二つの意味で重要である。一つは、人間として成長するために必要な体験、例えば触れ合い体験や自然体験などを欠いた生徒が多い今日、それを補うために重要である。もう一つは、道徳的価値の自覚は、自らの体験を振り返ることを通して可能になることから、価値の自覚を深めるための素材として重要である。道徳の時間で特に重要なのは、この意味においてである。」(16)とある。つまり、道徳の時間に体験を生かすとは、道徳の時間に体験的な活動そのものを実施するのではなく、それをどのように道徳の時間に位置づけるかという意味である。体験と道徳の時間の関

係は、体験を生かして心に響く道徳の時間とし、価値のより内面的な自覚の深まりを促したり、深まった道徳的価値のもとにねらいのある体験的な活動を行ったりするという相補的な関係である。

そこで、道徳の時間と学校の教育活動における体験の関連を図1-3に示した。

図1-3 体験と結びついた道徳の時間における「よりよく生きる力」の育成構想図



図で示したように、学校の教育活動全体の中でさまざまな体験活動の中の体験を生かし、生徒が自分のこととして道徳的価値を捉えたとき、生徒の心は動き、価値を深く自覚したり、発展させたりすることができるのである。

そして、道徳の時間に、体験で実感した価値を補充、深化、統合しながら、自己を振り返り、自己の内面と対話し、今後に向けての自分の課題に気づき、将来において、これに主体的に取り組もうとするとき、体験は意味ある経験として、生徒の中に蓄積されていくのである。そして、その姿

こそが生徒がよりよく生きようとする姿なのである。

なお、体験を道徳の時間に生かすことを考える場合、体験に含まれる道徳的価値を道徳の内容項目の視点で分析することが必要である。そうすることによって、体験と道徳の時間が共通するねらいのもとに結びつくことができ、体験を生かした道徳の時間の学習プログラムの開発ができると考えた。そのため、次章では、体験と道徳の内容とを結びつけるために、道徳の内容項目を整理・分析し、体験のねらいに含まれる道徳的価値との関連を検討することから始めることにした。そして、それをもとに、「体験を生かした35時間の道徳の時間の学習プログラムを提示する。

- (1) 京都市教育委員会『指導の重点』2001 p.6
- (2) 教育課程審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)』1998
- (3) 裴岩正子「体験を生かす視点をもつ」『道徳教育』431 明治図書 1995.5 p.8
- (4) 金井肇『道徳教育セミナー1 道徳教育の基本原則』第一法規 1992 pp.265~266
- (5) 前掲 注4 p.266
- (6) 押谷由夫『新しい道徳教育の理念と方法』東洋館 1999 pp.36~38
- (7) 前掲 注6 p.37
- (8) 前掲 注6 p.38
- (9) 文部省小学校編『初等教育資料』8月臨時増刊 東洋館 2000 p.130
- (10) 金井肇「アンケートの示す授業改善の方向」『道徳教育』.457 明治図書 1997.4(臨時増刊) p.18
- (11) 前掲 注10 p.18
- (12) 田中純夫「青年文化」『教員養成のためのテキストシリーズ第5巻青年期の課題と支援』新曜社 2000 p.41
- (13) 梶田叡一『自己意識の心理学』第2版 東京大学出版会 1988 p.78
- (14) 梶田叡一『教育における評価の理論 学力観・評価観の転換』金子書房 1994 pp.252~253
- (15) 前掲 注14 p.79
- (16) 金井肇編『学習指導要領早わかり解説中学校新道徳授業の基本用語辞典』明治図書 2000 pp.162~163

第2章 道徳の時間の学習プログラムの開発と展開

第1節 学習プログラムの開発に向けて

(1) 道徳の内容項目の整理と分析

中学校の新学習指導要領・道徳では、道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目を4つの視点に分けて示しており、さらにそれらの視点の下に23の内容項目が分類し挙げられている。(17)これらは、道徳の時間はもとより、教育活動全体を通して行われる道徳教育の内容である。

4つの視点と23の内容項目の整理と分析のために、まず4つの視点がどのような関係にあるのか検討をしてみた。4つの視点とは次に示すものである。

- 視点1 主として自分自身に関するもの
- 視点2 主として他の人とのかかわりに関するもの
- 視点3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関するもの
- 視点4 主として集団や社会とのかかわりに関するもの

これらの4つの視点は人間関係の広がりから捉えると、図2-1で示すように、自分自身を対象とする視点1を中心に、他の人とのかかわりを対象とする視点2、集団や社会とのかかわりを対象とする視点4、人間を包む自然や崇高なものとのかかわりを対象とする視点3が同心円状に構成されていると考えられる。

また、4つの視点は、相互に深い関連を持っており、それぞれの視点は、他の視点との関連を踏まえることによって、一層内容が充実することになる。(18)そこで、それぞれの視点が相互にどのような関連をもっているのかを検討することにした。

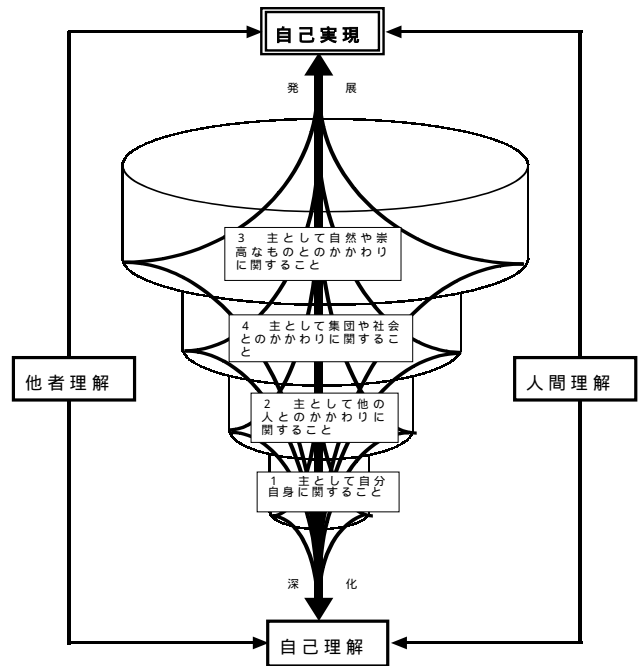
登浩二は、「どんなに自分自身以外の他者を憧れ、尊敬し、慕ったとしても他者になりかわることは不可能である。生きていくのは自分自身であり、自分自身のすべてが自分自身の出発点であることを認識しながら、自分自身のよりよい生き方を求め続けることが、人間には生まれながらに運命づけられている」(19)と述べている。

つまり、人間として「よりよく生きる」ことを求め続け、道徳教育において「よりよく生きる力」の育成をめざすとき、自分自身を深く知ること、つまり自己理解が不可欠であり、基盤となると思

われる。そして自己理解は、自分を取り巻く他の人や、自分が属している集団や社会とのかかわりの中で深まっていくものであり、さらに自分という素材を見つめれば見つめるほど、自分の生命の不思議さや有限性、自分の生命を支えている自然や崇高なものとのかかわりを自覚せざるを得ないため、その自覚を通して、人間理解・他者理解・自己理解が深化すると思われる。

これらのことを、道徳の4つの視点から考えてみると、1の視点の「自分自身に関すること」が基盤となり、視点2の「他の人とのかかわりに関すること」や視点4の「集団や社会とのかかわりに関すること」と関連させることで、自己理解・他者理解・人間理解が深まり、それぞれの視点が発展すると考えられる。そして、それぞれの視点を3の視点の「自然や崇高なものとのかかわりに関すること」で再び捉えることでこれらの視点の理解は、一層深められ、1の視点へと戻っていくと考えられるのではないかと思うのである。そこで、4つの視点の関係を図2-1のように捉えたのである。

図2-1 4つの視点の構造図



これら4つの視点の関係については、1年間の学習プログラムの流れを検討する際の根幹に当たるところである。

次に、23の内容項目の分析をしてみることにした。それぞれの内容項目を読んでいくと、一項目内にはかなりの道徳的価値が複合されているものがいくらかある。たとえば、表2-1の視点1の

(5)に「自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する」とある。この内容項目には、自分をしっかりと見つめるという「思慮、反省」の道徳的価値と、自分のことをよく知ったうえで、悪いところは改め、良いところを伸ばしていくという「個性伸長」の道徳的価値が含まれている。

体験を生かした道徳の時間を開発する場合、体験が含んでいる道徳的価値と道徳の内容項目とのつながりを検討する必要があると思われる。そ

の際に内容項目に複合されている道徳的価値を具体化し、いくつかのキーワードで整理することで、体験と道徳の時間のつながりが明確になり、ねらいがはっきりとした道徳の時間が開発できるのではないかと考えた。

そこで、内容項目を具体化し、キーワードを見つけるために、村田昇の内容項目の考察を参考にし(20)、小学校の内容項目からの系統性・発展性を分析することで、中学校の内容項目に含まれている道徳的価値を見直すことにした。(表2-1)

表2-1 小学校との内容項目の関連
視点1 主として自分自身に関すること

キーワード	小学1, 2年生	小学3, 4年生	小学5, 6年生	中学生
節度 自立	1-(1)健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	1-(1)自分でできることは自分でやり、節度のある生活をする。	1-(1)生活を振り返り、節度を守り節制に心掛ける。	1-(1)望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
努力	1-(2)自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。			
忍耐 意志		1-(3)自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。		
希望 向上心			1-(2)より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	1-(2)より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
判断 勇気	1-(3)よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	1-(4)正しいと思うことは、勇気をもって行う。		
自主 自律			1-(3)自由を大切にし、規律ある行動をする。	1-(3)自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任を持つ。
正直 誠実	1-(4)うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	1-(5)正直に、明るい心で元氣よく生活する。	1-(4)誠実に、明るい心で楽しく生活する。	
真理 理想			1-(5)真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	1-(4)真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
思慮 反省		1-(2)よく考えて行動し、過ちは素直に改める。		
個性伸長			1-(6)自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	1-(5)自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。

視点2 主として他の人とのかわりに関すること

キーワード	小学1, 2年生	小学3, 4年生	小学5, 6年生	中学生
礼儀	2-(1)気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	2-(1)礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。	2-(1)時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	2-(1)礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
思いやり 親切	2-(2)身近にいる幼いや高齢者に温かい心で接し、親切にする。	2-(2)相手のことを思いやり、親切にする。	2-(2)だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場にたって親切にする。	2-(2)温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつ。
尊敬 感謝	2-(4)日ごろ世話になっている人々に感謝する。	2-(4)生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。	2-(5)日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	
友情 信頼	2-(3)友達と仲良くし、助け合う。	2-(3)友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。		2-(3)友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
異性理解			2-(3)互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲良く協力し助け合う。	2-(4)男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
寛容 謙虚			2-(4)謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にす。	2-(5)それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方がることを理解して、謙虚に学ぶ広い心をもつ。

視点3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること

キーワード	小学1, 2年生	小学3, 4年生	小学5, 6年生	中学生
自然愛	3-(1)身近な自然に親しみ、動植物にやさしい心で接する。	3-(1)自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にします。	3-(1)自然の偉大さを知り、自然環境を大切にします。	3-(1)自然を愛護し、うつくしいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深める。 3-(2)生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。 3-(3)人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて人間として生きることの喜びを見いだすように努める。
敬虔 畏敬	3-(3)美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。	3-(3)美しいものや気高いものに感動する心をもつ。	3-(3)美しいものに感動する心や人間の力を越えたものに対する畏敬の念をもつ。	
生命尊重	3-(2)生きることが喜び、生命を大切にすることをもち。	3-(2)生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にします。	3-(2)生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	
強さ 気高さ				

視点4 主として集団や社会とのかかわりに関すること

キーワード	小学1, 2年生	小学3, 4年生	小学5, 6年生	中学生
役割 責任			4-(1)身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	4-(1)自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
権利 義務	4-(1)みんなが使うものを大切にし、約束やきまりを守る。	4-(1)約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。	4-(2)公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。	4-(2)法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。 4-(3)公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
公德心				
正義 公平公正			4-(3)だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	4-(4)正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
勤労 奉仕		4-(2)働くことの大切さを知り、進んで働く。	4-(4)働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。	4-(5)勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
家族愛	4-(2)父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	4-(3)父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。	4-(5)父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	4-(6)父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
愛校心	4-(3)先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	4-(4)先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。	4-(6)先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	4-(7)学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
郷土愛	4-(4)郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	4-(5)郷土の文化と伝統を大切にし、郷土を愛する心をもつ。	4-(7)郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	4-(8)地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
愛国心		4-(5)我が国の文化と伝統に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。		4-(9)日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
国際理解			4-(8)外国の人々や文化を大切にする心をもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	4-(10)世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

小学校と中学校の内容項目は、「人間としての生き方の自覚」を身につけることをめざし、児童生徒の発達的特質を考慮して、学年段階に応じて各項目が系統的・発展的に示されている。そこで、小学校の低学年（第1学年及び第2学年）中学年（第3学年及び第4学年）高学年（第5学年及び第6学年）中学校の内容項目を「最初の段階から継続的に取り上げられているもの」「学年段階が上がるにつれて新たに加えられるもの」「学年段階が上がるにつれて統合されていくもの」という視点からその系統性・発展性を分析することにした。

たとえば、視点2の「礼儀」については、その発達段階にあわせて、児童の身近にある具体的な内容の表記から学年が進むにつれて、抽象的な表記に変わるものの小学校低学年から中学校まで、継続的に取り上げられている内容である。

また、同じく視点2の「寛容・謙虚」について

は、他の人とのかかわりに関することにおいて、その基盤となる「礼儀」「思いやり・親切」「尊敬・感謝」「友情・信頼」が培われた上で、小学校高学年になって新たに加えられた内容であり、それは、中学校へと継続していく。

さらに、視点1の「思慮・反省」のように、小学校中学年で新たに加えられた「よく考えて行動し、過ちは素直に改める」という内容は、小学校の高学年では低学年から継続して取り上げられていた「節度・自立」に「生活を振り返り」という言葉で統合されている。そして、中学校では再び、小学校の高学年で新たに加わった「個性伸長」という内容とともに統合され、「自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する」と、一つの内容項目になっている。

このようにみていくと、中学校の23の内容項目

に含まれている複数の価値が明らかになり、キーワードを見つけ出すことができた。

そして、そのキーワードをもとに、体験のねらいに含まれる道徳的価値を道徳の内容項目の視点で分析し、それぞれの体験と道徳の時間の関連を分析した。

(2) 体験と内容項目との関連

学校の教育活動における体験にどのような道徳的価値が含まれているかを検討するために、体験と道徳の内容項目(前項で分析した30のキーワード)との関連をマトリックスで整理することにした(表2-2)。なお、一つの体験の中には、複数の道徳的価値が含まれているため、その中でもとくに関連の深いものをつけてみた。

ここで取り上げる体験は、すべての生徒に共有する活動を通じての体験であり、しかも一般的に中学校で行われているものという観点で選択した。そして、その体験を「年1回行なわれる体験」

「年間を通し定期的に行なわれる体験」「年間継続的に行なわれる体験」の3パターンに分類し、内容項目との関連を分析することにした。

また「年1回行なわれる体験」には、入学式や卒業式などの儀式的行事も含んでいる。儀式的行事については、学習指導要領の第4章「特別活動」第2「内容」C「学校行事」に含まれており、「学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展望への動機付けとなるような活動を行なうこと」(傍点は筆者による)(21)とある。本研究での学校教育における体験は、第1章第2節(2)「生かすべき体験とは」の項で示したように、教育的意図をもって組織されたものであり、経験とし生徒の内面に積み重なってくものと捉えているので、前述した儀式的行事の内容と照らし合わせても、体験として道徳の時間に生かすことは、生徒の道徳的価値を深める上で、有効であると考えた。

表2-2 学校教育における体験と道徳の内容項目との関連

視点	活動内容 内容項目		年1回行われる体験																				
			1学期					2学期					3学期										
			入学式	新入生歓迎会	学校案内	学級目標	部紹介	春体壮行会	創立記念日	日曜参観	宿泊合宿	夏季大会開会式	リーダー合宿	合唱コンクール	体育祭	文化祭	生徒総会	生徒会役員選挙	校外学習	避難訓練	三年生を送る会	卒業式	修了式
1	(1)	節度・自立																					
	(2)	努力																					
		忍耐・意志																					
		希望・向上心																					
		判断・勇気																					
2	(1)	自主・自律																					
	(2)	正直・誠実																					
		真理・理想																					
		思慮・反省																					
		個性伸長																					
3	(1)	礼儀																					
	(2)	思いやり・親切																					
		尊敬・感謝																					
		友情・信頼																					
		異性理解																					
4	(1)	寛容・謙虚																					
	(2)	自然愛																					
		敬虔・畏敬																					
		生命尊重																					
		強さ・気高さ																					
4	(1)	役割・責任																					
	(2)	権利・義務																					
		公德心																					
		正義・公平公正																					
		勤労・奉仕																					
		家族愛																					
		愛校心																					
		郷土愛																					
		愛国心																					
		国際理解																					

年間を通し定期的に行われる体験

年間継続的に行われる体験

視点	活動内容		個人目標作り	班目標作り	委員・係決め	席替え	健康診断	定期テスト	教育相談	球技大会	懇談会	大掃除	始業式	終業式	人権学習	性教育	進路学習	係・当番活動	部活動	学習	学校生活		
	内容項目																						
1	(1)	節度・自立																					
		努力																					
	(2)	忍耐・意志																					
		希望・向上心																					
	(3)	判断・勇気																					
		自主・自律																					
	(4)	正直・誠実																					
		真理・理想																					
	(5)	思慮・反省																					
		個性伸長																					
2	(1)	礼儀																					
	(2)	思いやり・親切																					
		尊敬・感謝																					
	(3)	友情・信頼																					
	(4)	異性理解																					
3	(1)	自然愛																					
		敬虔・畏敬																					
	(2)	生命尊重																					
(3)	強さ・気高さ																						
4	(1)	役割・責任																					
	(2)	権利・義務																					
	(3)	公德心																					
	(4)	正義・公平公正																					
	(5)	勤労・奉仕																					
	(6)	家族愛																					
	(7)	愛校心																					
	(8)	郷土愛																					
	(9)	愛国心																					
	(10)	国際理解																					

なお、各教科における体験と、総合的な学習の時間における体験については、それぞれの学校の独自性があるため、マトリクスには取り上げていない。各教科や総合的な学習の時間での体験を生かした道徳の時間の展開については、「おわりに」で体験を生かした道徳の時間の今後の展開として述べることにする。

マトリクスを分析してみると、が多くついたキーワードには1 - (2)「希望・向上心」、2 - (3)「友情・信頼」、4 - (1)「役割・責任」などが挙げられる。これは、学校教育という場での体験がもっている性質に関係があると思われる。学校教育は、さまざまな集団を通じて、集団や一人一人の生徒の向上を図るということがその基盤にある。

つまり、集団の意義を理解し、その中での自分の役割を認識し、責任をもってその役割をやり抜

くことによって、集団が向上する。それが、学校生活での核となり、人間関係が深まったり、自分自身が高まったりするのである。そのなかで、さらに、自分を成長させる高い目標を持ち、それに向かって、進んでいくことが学校教育での体験の大きなねらいであるので、「役割・責任」「友情・信頼」「希望・向上」という項目と強く結びついたのでと考えられる。

学校教育での体験を道徳の時間に生かす場合、これらの体験のもつ性質を捉え、これを生かすように道徳の時間を展開することが大切であると思われる。

また、反対に、体験と関連の少ない内容項目には、4 - (9)「愛国心」、4 - (10)「国際理解」などが挙げられる。これらの内容項目に関しては、本研究では触れていない各教科や総合的な学習の時間に多く関連することが想定される。

これらの内容項目については、各教科や総合的な学習の時間とを関連させた道德の時間を展開する場合に深められると思われる。

第2節 学習プログラムの展開

(1) 体験と道德を結びつけたユニットの構成とそのねらい

道德の時間へのアプローチの改善として、体験を道德の時間に生かす場合、いろいろな展開が可能である。時間の流れに沿って大きく分けると、次の3通りの展開が考えられる。

- 1, 体験の前に道德の時間を設定する。
- 2, 体験の後に道德の時間を設定する。
- 3, 体験の前後に道德の時間を設定する。

1の体験の前に行う道德の時間では、生徒に体験で気づいてほしいと思う道德的価値をねらいとした展開となる。生徒は道德の時間に道德的価値を自覚する。そして体験に臨む。すると、価値の自覚がないままの体験とは違い、自分への課題を意識した充実した体験となる。つまり、生徒は体験の中で道德の時間に自覚した道德的価値を実感し、さらに、その体験の中で深め、発展させ、自分のものとして消化していくのではないかとと思われる。その意味で1の展開は重要である。

2の体験の後で行う道德の時間では、それぞれの生徒が体験で気づいた価値を補充・深化・統合しながら、体験を意味ある経験として子どもの中に蓄積することをめざす展開となる。同じ活動の中で体験をしても、生徒の受け止め方は一人一人違う。ある生徒は、価値に気づいたところで体験を終わっているかもしれないし、ある生徒は、気づいた価値を自分のこととして捉える段階まで進んでいるかも知れない。また、ある生徒は、自分のこととして捉えた価値をこれからの自分の生き方に結びつけて考える段階にあるかもしれない。

事後の道德の時間では、これら一人一人の生徒が個々に自覚した道德的価値を学級で共有し、より深めていくのである。自分が感じたよりも深く価値を自覚した生徒の意見を聞くことで、他の生徒の自覚は深まるだろうし、意見を交換しあうことで、学級全体がそれまでよりも深化した段階にいたるのではないだろうか。そして、一人一人の生徒が、他の人の考えを聞き、自己と対話していくことで、道德的価値を自己の内面で自覚するのに伴って、体験が意味ある経験として子どもの中

に蓄積していくのである。

そして、これらの1と2の展開を連続させ、一体化したものが3の展開である。体験の前の道德の時間も、体験の後の道德の時間も、それぞれ生徒の道德的価値を深めるためには、重要であると思われる。そこで、体験の前後に道德の時間を設定することで、それぞれの道德の時間のよさが生かされ、体験そのものも充実したものになると同時に、一連の流れの中で生徒の中に連続した思考を生み、道德的価値を自己の内面において深く自覚することができるのではないかと考えた。

そこで今回の研究では、この「体験の前の道德の時間」と「体験」と「体験のあとの道德の時間」を1つのユニットと捉えることにした。

また、体験を道德の時間に生かすことで、道德的価値の自覚がどのように深まるのかを考えたとき、知的理解と感性的理解の2つの側面が考えられるのではないかとと思われる。登浩二は著書の中で「道德的価値を身につけるのは一般的には知的理解からなされるよりも、より直観的である場合が多いように思われる」(22)と述べており、さらに「道德性を養ううえで『わかる』知性と一緒に『感じる・価値のあるものに気づき反応する』感性が重要であると考え」(23)としている。「わかる」知性を知的理解、「感じる・価値のあるものに気づき反応する」感性を感性的理解と捉えると、生徒が一つ一つの道德的価値を自覚し、道德性を高め、それが道德的実践へと発展するためには、道德の時間において知的理解と同時に感性的理解を重視しなければならない。ただし、1時間の道德の時間が知的理解だけで、あるいは感性的理解だけで展開することは考えられない。つまり、知的理解と感性的理解は螺旋状に関連し合いながら、道德的価値の自覚を生徒の内面に深めていくのである。

たとえば、自分の目の前で、幼い子どもが転倒し、泣いている。瞬時に「かわいそうだ」と感じ、「助けてあげなければ」と思う。そこには、何の理屈もない。つまり、「かわいそう 助けてあげなければ」という道德的な行動が感性で行なわれているのである。一方、目の前にいじめにあっている人がいる。かわいそうだと感じる。助けてあげたいとも思うが、その後自分がいじめられる対象になるかもしれないと考え、躊躇する。しかし、そこで自分の信念や生き方と照らしあわせてみて、このままではいけないと考え、行動に移る。ここでは、知的な論理的思考で自分のとるべき行動を選択しているのである。

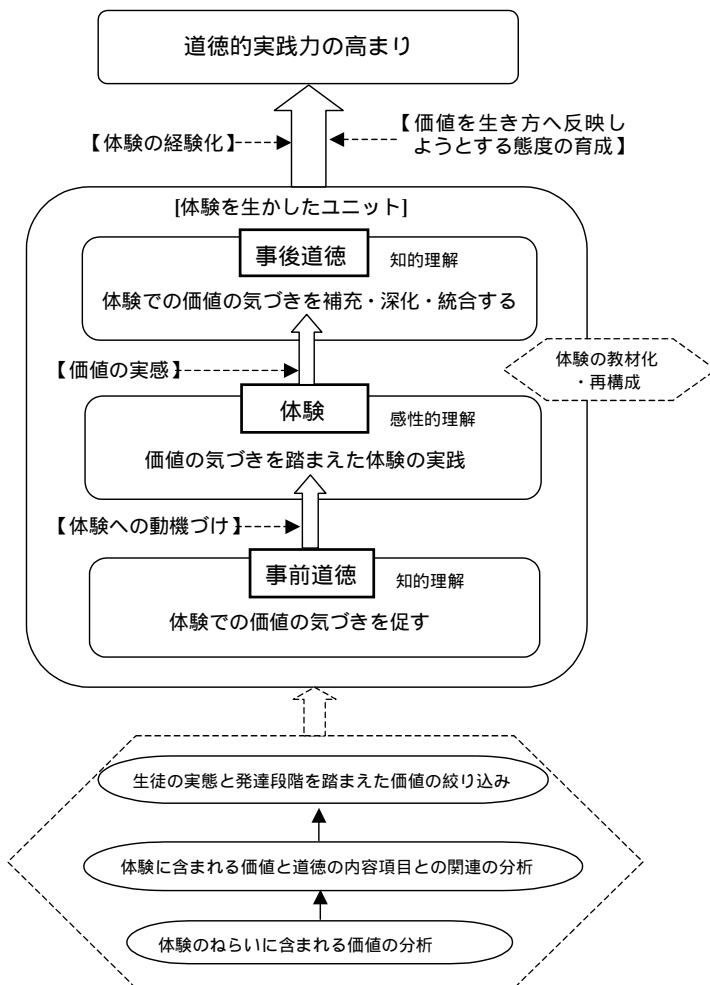
この例で考えれば、「かわいそう 助けてあげなければ」という感性で理解した価値は、なぜかわいそうなら助けてあげなければならぬのかということを知的に理論立てて思考できることにより、価値は深まる。また、いじめられている人を見たときに、知的に理解してから行動に移すのではなく、それが感性で行動することができるようになると、それは、実践力が養われたことになる。

つまり、感性的理解から知的理解へ、知的理解から感性的理解への双方向が価値の自覚を深めるとともに、道徳の実践力へと発展させるのである。

このように、知的理解と感性的理解は切り離すことはできないが、体験と道徳の時間とのユニットを構想するとき、ねらいとしている価値をそれぞれの時間でどのように理解していくのか、つまり、知的理解に重きをおくのか、感性的理解に重きをおくのかということが学習プログラム開発の1つの観点となるのではないかと考えた。

これらのことを踏まえ、ユニットの構想の手順を図2-2に従って説明することにする。

図2-2 ユニットの構想図



まず、事前道徳の前に、体験に含まれる道徳的価値を分析することから始めた。教育的意図のもとに実施される体験には、それぞれねらいがある。そこで、そのねらいの中にどのような道徳的価値が含まれているのかを分析した。そして、それが道徳の内容項目(ここでは、前節の30のキーワード)とどのように関連しているのかを検討した。

体験のねらいに含まれる道徳的価値は、一つとは限らず、むしろ、複数含まれている場合の方が多いため、生徒の発達段階や実態を考慮し、そのユニットでのねらいとなる内容項目(キーワード)を絞り込んでいった。そして、これらの手順を踏まえた後、めざすべきねらいのもとに、ユニットの展開を開発していった。

ユニットの第1段階である事前道徳では、主に知的理解による価値の気づきを促す授業の展開を考えた。そして、そのことが体験への動機づけとなるようにした。

第2段階では、事前道徳で気づいた価値の基に、体験が実践された。体験では、生徒の感性が刺激されることによって、価値を実感し、理解することをめざした。

そして、第3段階の事後道徳では、事前道徳、体験で深めてきた価値の自覚を学級で補充、深化、統合する時間としての展開を開発した。この事後道徳では、体験で得た価値の感性的理解を知的理解に深めることに、体験を生かした。特に、生徒の体験時の写真やビデオ、感想文などを教材化したり、再構成して生かしたりする場合には、体験での価値の感性的理解がさらに刺激され、より深い知的理解へと発展することが期待されるであろう。

また、道徳の時間の展開を考える際には、教材や、学習方法、学習形態などの道徳の時間そのものの工夫も試みた。

たとえば、教材の工夫では、生徒が興味・関心を持っている歌手の曲を資料として使うことによって、道徳の時間が身近に感じられる雰囲気を作り、自分のことと重ねあわせて考えることを容易にしたり、感性を刺激するようなインパクトのある資料を提示することで、生徒の既存の価値を揺さぶったりした。

学習方法の工夫では、フォトランゲージの手法を用い、生徒に写真を見せながら、自由に意見を述べさせたり、展開を先取りしないために、ワークシートに設問を書か

ず、生徒がその場で感じた意見を率直に表現する工夫をしたりした。これらは、生徒の道徳的価値の自覚を深め、自己の内面と深く対話することにおいて効果があったと思われる。

道徳の時間そのものの工夫は、第1章第2節(1)「体験を道徳の時間に生かす意義」のところで述べたように、道徳の時間が心に響く時間となるために、体験を生かした道徳の時間の開発というアプローチの工夫とともに、欠かせない観点である。

これらの道徳の時間そのものと、道徳の時間へのアプローチを工夫したユニットを通して、道徳の時間が心に残り、さらに、自分の体験と照らし合わせながら、自己の内面と対峙し、今までの価値観を揺さぶられ、心を動かされる。そして、このユニットで深まった道徳的価値を自分の生き方に反映していこうとする態度が育成されたとき、道徳の時間は心に響く道徳の時間となり、また、体験そのものも、意味ある経験として生徒の中に蓄積され(体験の経験化)、「よりよく生きる力」という道徳的実践力の高まりにつながると考えた。

(2) 体験を生かした 35 時間の道徳の時間の学習プログラム

ここでは、第1学年の1年間で行なわれるであろう体験の中から、19の体験を生かし、その前後に道徳の時間を設定することを基本に展開した、第1学年 35 時間の学習プログラムを次ページの表2-3として提示する。

学校教育の中で行われる体験の中から 19 の体験を抽出するにあたっては、生徒の心に深く残ると思われる1年に1回行われる体験を重視した。具体的な抽出理由については、学習プログラムの「ユニット全体のねらい」のところに含めて述べてある。

そして、第1学年の1年間を見通し、道徳の内容の4つの視点の相互の関連と、それぞれの時期に生徒に身につけてほしい道徳の内容項目と、生徒の実態と発達段階を考慮しながら、道徳の時間と体験とのユニットを構成した。それを、図に示したものが、図2-3である。図として示すことによって、内容項目と体験とのつながりが明確になり、1年間を見通した計画が立てやすいとともに、内容項目に偏りがあることなども把握しやすくなっていると思われる。

次に、「体験を生かした 35 時間の道徳の時間の

学習プログラム」をどのような観点で、構成したのかを説明することにする。

第1学年の1学期という時期の生徒は、今までに経験したことのない新しい集団の中で、期待や不安の入り混じった気持ちを抱いている。そして、その中でどのように他の人と交わり、行動すればいいのか知りたがっている。そこで、その気持ちを希望ある中学校生活に結びつけるために、集団の意義を正しく理解し、自分の役割と責任を自覚することを通じて、自分自身が向上していくためには、どうしていけばいいのかを考えさせるユニットを構成した。

2学期には、いろいろな学校行事が多く行われ、集団だけでなく、生徒自身も集団の中で大きく成長する学期である。そのことを踏まえ、集団の中で仲間と協力して、一つのことをやり遂げることの大切さを考えるユニットを構成した。また、生徒が心身ともに成長するこの時期に、生命を尊ぶ心を知るユニットも組み入れることで、今後のユニットがさらに深まることをめざした。

3学期には、それまでに培った道徳的価値をさらに、深め、発展させることを中心に、1年生のまとめと、次の学年への前向きな姿勢を培うユニットを構成した。

以上のことを踏まえ、学習プログラムを構成し開発した。また、この学習プログラムでは、次のことを提示した。

ユニットに生かした体験
ユニット全体のねらい
事前道徳か事後道徳か
道徳の時間でねらいとしている内容項目と
キーワード
道徳の時間で使用する資料など
それぞれの道徳の時間でのねらい

(17)文部省『中学校学習指導要領』大蔵省印刷局 1998 pp.98~100

(18)文部省『中学校学習指導要領 解説 - 道徳編』大蔵省印刷局 1999 pp.32~33

(19)登浩二『小学校道徳教育の目標と内容・方法』道徳教育の基礎と展望』福村出版 1999 pp.130~131

(20)村田昇『道徳教育の目標と内容』『新学校教育全集9道徳教育』ぎょうせい 1994 pp.54~58

(21)前掲 注17 p.103

(22)前掲 注19 p.124

(23)前掲 注19 p.124

図 2 - 3 体験を生かした道徳の時間の構想

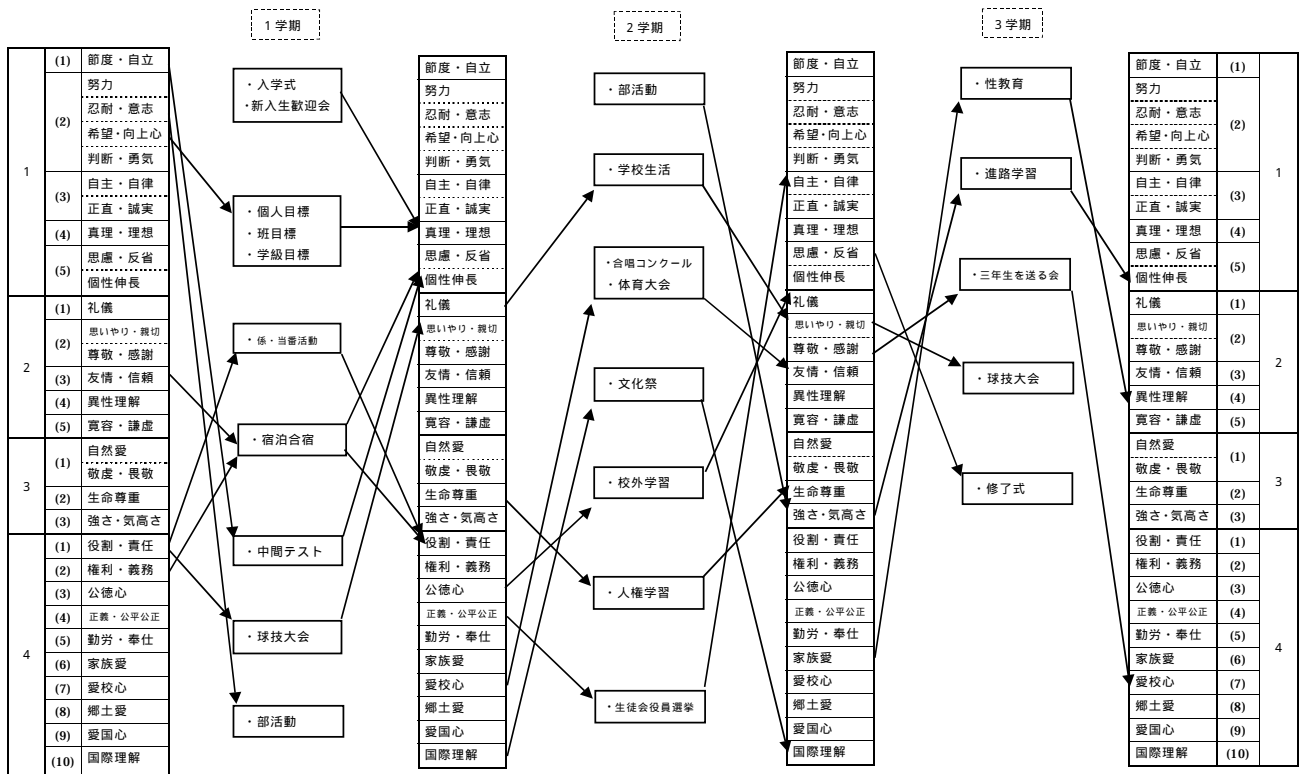


表 2 - 3 体験を生かした 35 時間の道徳の時間の学習プログラム

1 学期の体験と結びついた道徳の時間

体験	ユニットのねらい	設定	内容項目とキーワード	資料	本時のねらい
ユニット ・入学式 ・新入生歓迎会	中学校生活に期待と不安の入り混じった気持ちで入学してきた 1 年生が、初めて参加する大きな学校行事である。入学式・新入生歓迎会とも入学してきた 1 年生を温かく迎える行事であり、その行事の中で先生や上級生たちの言葉を聞き、1 年生の生徒は中学校生活に希望を抱き、理想を求めるようになる。中学校生活に積極的に取り組む態度を育てる。	事後	1-(4)真理・理想	・入学式や新入生歓迎会の写真やビデオ ・『美しく自分を染めあげて下さい』 サトウハチロー (『あすは君たちのもの』 日本放送出版協会刊)	多くの人に祝福されて入学してきた生徒に高い理想の実現へと努力する姿勢を育てる。
ユニット ・個人目標作り ・班目標作り ・学級目標作り	入学式・新入生歓迎会を通じて生徒の内には中学校生活に希望や理想が漠然と描かれてきている。その思いを具体的に言葉として表現する活動が「目標作り」である。今の前向きな気持ちを大切に、自分の理想を実現するために地道な努力を積み重ねる姿勢を培う。	事前 事後	1-(2)希望・向上心 1-(4)真理・理想	・「中学生になって」 生徒作文 ・ミレー『落穂拾い』の 拡大コピー ・『農民画家ミレー』 (『指導の手引 5』・文部省) ・生徒の立てた目標	新たな気持ちでスタートした生徒の「中学」に対する思いを大切に、希望や向上心をもって、着実にやり抜く強い意志を育てる。 真理や真実を求め、絶えず努力することの大切さを理解し、自己の人生を切り拓いていこうとする意欲を養う。
ユニット ・係、当番活動	入学当初は教師主体で学校生活を過ごしているが、やがては生徒自身の係、当番活動がそれにとって代わるようになる。集団の向上のために集団の一員としての	事前	4-(1)役割・責任	・『サッカー』 (『指導の手引 4』・文部省)	円滑な集団生活と集団の向上のために、各自が担っている役割と責任を果たそうとする態度を養う。

ト		自覚をもち、係、当番活動の意義を理解し、自主的に活動に取り組む態度を育てる。	事後	4-(1)役割・責任	・『世界の学校掃除地図』 (『心の教育 日本教育の再発見』学陽書房)	毎日の生活の中で密接にかかわっている「掃除」を題材として、集団の中での役割・責任の自覚を深めるとともに、役割と責任を果たすことが自己の達成感や成就感につながることを理解する。
ユ ニ ッ ト	・宿泊合宿	1年間の行事の中でも、仲間と寝食をともにする「宿泊合宿」はその思い出が生徒の心に深く刻まれる大きな行事の一つである。「宿泊合宿」での自然とのかかわり、仲間とのかかわり、集団とのかかわりを通じ生徒は精神的に大きく成長する。「宿泊合宿」の活動を通じ、集団の一員としての自覚を深め、仲間と協力する態度を養う。	事前	2-(3)友情・信頼	・『ただいだけで』 相田 みつを (『一生感動 一生青春』文化出版局)	各自が「友達」に求めるものを考える中で、それが相手から自分に求められているものだとすることに気づき、真の友達とは何かを理解する。
			事前	4-(2)権利・義務	・生徒への「決まり」についてのアンケートの集計結果 ・『一本のジュース』 (『中学校道徳自作資料集』明治図書)	自己が所属する集団の意義についての理解を深め、集団生活の中に必ず存在する「決まり」を単なる押し付けとせず、協力し合って集団生活を向上させようとする態度を育てる。
			事後	1-(5)個性伸長	・『ぼくの性格を作った友人』 大林宣彦 (『PHP』平成3年9月号)	自己の欠点のみに目を向けることなく、自己の優れている面の発見に努め、自己受容・自己理解を深める態度を育てる。
			事後	4-(1)役割・責任	・宿泊合宿の写真やビデオ	集団生活の向上には、各自が集団の中で生活していることを自覚し、その中で役割と責任を果たそうとする態度や、お互いに励ましあったり協力しあったりする人間関係が必要であることを理解する。
ユ ニ ッ ト	・中間テスト	中学校に入って初めての定期テストに、生徒は、緊張感や不安感を持つ。しかし、目標を持ちそれに向かって計画を立てて取り組む姿勢は学習以外の生活全般においても大切なことである。「中間テスト」を通じ、目標に向かって計画的に取り組む態度や自分の力を伸ばそうとする姿勢を養う。	事前	1-(1)節度・自立	・『整理と整とん』 梅棹忠夫 (『知的生産の技術』岩波書店)	身の回りを整えて、自分なりの整理の仕方を工夫する姿勢を養う。
			事後	1-(5)個性伸長	・『自分のスタイル』自作	自分の適性や力を正しくつかみ、個性を伸ばし、より良い生き方を求めようとする態度を育てる。
ユ ニ ッ ト	・球技大会	学級は様々な個性を持つ人々の集まりである。その集団が心をつなげて取り組む行事が「球技大会」である。狭い仲間意識にとらわれることなく、一人一人を尊重し、目標に向かって協力し合う態度を育てる。	事前	4-(1)役割・責任	・『ある日の球技大会』 (『指導資料道徳・平成6年』京都市立中学校教育課程)	自己が所属するさまざまな集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し、協力し合って集団生活の向上に努める態度を育てる。
			事後	2-(2)思いやり・親切	・球技大会のビデオや写真 ・球技大会の生徒作文	相手の立場にたって、お互いを思いやる気持ちを持つことがクラスの集団意識を高めることを理解すると同時に、仲間を尊重する態度を養う。

ユ ニ ット	・部活動	1学期も終わりに近づき、部活動にも慣れた頃である。間近に夏季大会を控え次第に練習にも熱が入ってくると同時に、夏の厳しい暑さと練習に部活動を続けることに不安を感じ始めるのもこの頃である。より高い目標をめざし、勇気と希望をもって粘り強くやり遂げようとする姿勢を育てる。	事前	1-(2)忍耐・意志	・『うらやましいバレー部』 (『指導資料道徳・平成10年』京都市立中学校教育課程)	くじけていく気持ちの中に、惨めさ、苦しさから逃避する気持ちがあることに気付かせ、安易な妥協をせず、目標に向かって根気よく努力しようとする態度を養う。
--------------	------	--	----	------------	--	--

2学期の体験と結びついた道徳の時間

	体験	ユニットのねらい	設定	内容項目とキーワード	資料	本時のねらい
ユ ニ ット	・部活動	夏の厳しい暑さと練習を乗り越えて、生徒は2学期を迎える。今までいろいろなことを教えてくれた3年生が引退し、新たなメンバーで部活動を開始する。3年生の思いから、人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを知り、それを信じて生きていこうとする態度を育てる。	事後	3-(3)強さ・気高さ	・『3年生から後輩へのメッセージ』 生徒作文	人間の持つ弱さを克服し、惜しみなく努力することで自分の人生を切り拓いていこうとする態度を養う。
ユ ニ ット	・学校生活	1学期は入学して何もかもが新鮮な気持ちで取り組めたものの、夏休みをはさんで、入学時の前向きな気持ちが薄れはじめたり、学校生活への慣れからけじめのない行動をとったりする生徒もいる。2学期の最初にもう一度学校生活を振り返り節度を守り節制に心掛ける態度を育てる。	事前	2-(1)礼儀	・『挨拶できなきゃ留年』 (『毎日新聞』2001年5月2日付)	挨拶の意義を理解し、相手に対して尊敬や感謝の気持ちを持って、時と場をわかまえて挨拶する態度を養う。
			事後	2-(2)思いやり・親切	・『夜のくだもの屋』 杉みき子 (『小さな町の風景』偕成社)	他者のいたわりや励ましをとおして、思いやりの心を育む。
ユ ニ ット	・合唱コンクール ・体育大会	生徒が主体となって学校全体で取り組む最も大きな行事が「学校祭」である。その中でも、合唱コンクールと体育大会は、学級や、学年の壁を越えての縦割りチームで勝敗を争う行事であり、生徒同士の仲間意識が向上し、学級の一員としてまた、学校の一員としての自覚が高まると思われる行事である。この機会に自分が所属している集団への帰属感や仲間を大切に思う気持ちを養う。	事前	4-(7)愛校心	・昨年度の合唱コンクールのビデオ ・合唱コンクールについての昨年度の生徒作文	学級や学校の一員としての自覚をもち、一つの目標に向かって仲間と協力する態度を養う。
			事後	2-(3)友情・信頼	・『ちいちゃんをつめ』 (『われら中学生第3集』文英堂)	友情の尊さを理解し、互いに励まし合い、高め合う心から信頼できる友達を持つようとする意欲を養う。
ユ ニ ット	・文化祭	「学校祭」の一つとして文化祭がある。様々な文化的な取組が考えられるが、例えば、外国の文化に接することで自分の国の文化を見つめ直すこともその一つである。自分の価値観にとらわれることなく、他の国にも目を向け、謙虚に学ぼうとする広い心をもつことの大切さを知り、進んで国際協力に取り組む態度を養う。	事前	2-(10)国際理解	・『Stand Up』 倉木 麻衣 (『Perfect Crime』GIZA studio)	自分の国の文化や習慣にとらわれることなく、他の国にも目を向けて、国際的視野に基づいたものの見方や考え方を養う。
			事後	2-(10)国際理解	・『日本人の顔』 (『ひらがなタイムズ』ヤック企画) ・『世界の教科書に描かれた日本人の顔』 (『理解されないニッポン』祥伝社)	他の国の人に対する偏見やそこから起こる差別は「無知」や「誤解」に起因していることが多々ある。自分の国が誤解されていることには、不快感や憤りを感じるものの、自分たちもまた、他の国について誤解していることには気づいていない。お互いに偏見

						や差別をもたず、世界の国の人々と交流するために他の国の文化や習慣を知り、理解しようとする態度を養う。
ユ ニ ット	・校外学習	宿泊を伴わない校外学習である。公共交通機関を利用する場合や、一般の人々と同じ施設を利用する場合も多々ある。自分たちの集団の中だけで物事を捉え、行動するのではなく、常識のある態度で広く公共の福祉の立場から行動できる態度を育てる。	事前	4-(3)公德心	・『一枚の写真』 (『指導資料道徳・平成10年』京都市立中学校教育課程) ・『私の夢見る京都』 (同上)	社会の秩序と規律を守ることによって、よりよい生活が保障されることを理解させ、公德心をもって自ら進んで社会の秩序と規律を高めていこうとする態度を育てる。
			事後	2-(1)礼儀	・『電車のマナーって何が正しいのか...』 (インターネットより)	他人に直接迷惑をかけていないと思う行為でも、誰かが不快な思いをしていることに気づき、共に楽しく明るく生きるために時と場を考えた行動を取る態度を育てる。
ユ ニ ット	・人権学習	人権学習は、日々の学校生活の中で折に触れて扱われるものであるが、12月の人権週間にあわせて中学校3年間を見据え、系統的・計画的に行われることが多い。学年によって扱うテーマが異なるが、生徒は人権について真剣に考える。1年生では人権の基盤としての生命を尊重する態度を育てる。	事前	3-(2)生命尊重	・『ロード』 虎舞竜 (日本クラウン株式会社) ・『人体を原料にしてできるモノ』 (『MONEY 無用の雑学知識』KKベストセラーズ) ・『「いじめ」で中3自殺』 (『読売新聞』1985年9月27日付) ・『お父さんが小さなつばにはいってしまった。ぼくはとてもくやしい』 (『毎日新聞』1985年9月3日付)	すべての人は、誰かの「大切な人」であることを確認し、人体の値段を考えることで人の「いのち」は唯一無二であり、なにものにもかえることはできないことを理解し、自他の生命を尊重する態度を養う。
			事後	3-(2)生命尊重	・『おばあさんの写真』 川崎 晶洋 (『今を生きる人々に学ぶ』明治図書) ・『冗談のつもりが』自作	自分を含むすべての人は、誰かの大切な人であることを理解し、すべての人の命を唯一無二でかけがえないものとして尊重する態度を培う。
ユ ニ ット	・生徒会役員選挙	2学期には生徒会の役員の交代がある。生徒会の主体が3年生から2年生になる。今まで生徒会の役員ではなかった1年生の中にも生徒会の一員になる生徒も出てくる。役員選挙を通じ短絡的に人の意見に同調せず自分の考えを主張する態度や、自分たちの学校を自分たちの手で作っていかうとする姿勢を育てる。	事前	4-(4)正義・公平公正	・『勇敢な少年』山田洋次 (『映画館(こや)がはねて』講談社)	正義を重んじ、だれに対しても公平公正な態度で接し、自分の気持ちを正直に表すことの大切さを知る。
			事後	1-(3)自立	・『学校生活の中で』 (『指導資料道徳・平成6年』京都市立中学校教育課)	自立の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果について責任をとろうとする態度を養う。

3学期の体験と結びついた道徳の時間

体験	ユニットのねらい	設定	内容項目とキーワード	資料	本時のねらい
ユ ニ ット	・性教育	事前	4-(6)家族愛	・『コロッケの思い出』 上前淳一郎 (『読むクスリ』文芸春秋社)	母親の子供に対する愛情の深さを通じ、家族の絆の強さを理解する。

ト		愛の念や異性を尊重する態度を育てたい。	事後	2-(4) 異性理解	・『ひかるはひかる』 (豊中市教育委員会)	「女・男」に対する固定観念があることに気づき、異性を正しく理解しようとする態度を養う。
ユニット	・進路学習	3年生の進路決定に関連して、1年生も自分の進路について考える。この進路学習を通じて、より高い目標に向かって自分の弱さや醜さを克服して崇高な生き方をしようとする態度や、自分の個性を生かそうとする姿勢を育てる。	事前	3-(3) 強さ・気高さ	・『一番星』 (『指導の手引3』文部省)	人間には弱さや醜さもあるが、それを乗り越え、人間としての誇りをもって崇高な生き方をしようとする意欲を高める。
			事後	1-(5) 個性伸長	・『ちょっと立ち止まって』 桑原茂夫 (『中1国語』光村図書)	自分を違う角度から見ることによって、新たな自分を発見することができることを理解し、自分の可能性を広げようとする態度を養う。
ユニット	・3年生を送る会	卒業式を前に、生徒会が中心となって、お世話になった3年生を温かく送り出す行事である。3年生に対する感謝と尊敬の態度や学校の一員としてよりよい校風を樹立しようとする態度を育てる。	事前	2-(2) 尊敬・感謝	・『卒業する3年生へ』 生徒作文	お世話になった3年生に対して、尊敬や感謝の気持ちを持つ。
			事後	4-(7) 愛校心	・『3年生から在校生へ送る言葉』 生徒作文	学校の一員としての自覚と誇りを大切にできる態度を養う。
ユニット	・球技大会	1年間が終わりに近づいたこの時期、球技大会を行う学校も多い。学級作りを意識した1学期の球技大会とは異なり、3学期の球技大会では1年間のまとめとしての行事である。学級の一員としての自覚のもとに一つの目標に向かって協力し合ってやり遂げる態度を育てる。	事前	2-(2) 思いやり・親切	・『仲間さがし』 (『エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集』図書文化)	自分のことだけでなく、周りの人のことも考えて、思いやりや親切の心をもって接する態度を養う。
ユニット	・修了式	いよいよ1年間が終わり、春休みの後には、2年生となる。学校生活においても、学習においても、中学校での充実した時期になる。この1年間を一人一人がしっかりと振り返り、さらに向上していこうとする態度を育てる。	事前	1-(5) 思慮・反省	・入学式の時のクラス写真 ・入学当初の生徒作文	1年間の学校や家庭での生活を振り返り、自己を見つめることで2年生に進級する心構えをつくる。

第3章 実証授業の分析と考察

第1節 ユニット「文化祭」

(1) ユニット「文化祭」のねらいと展開の流れ
「学校祭」という学校行事の一つに文化祭がある。「学校祭」は学校行事の中でも、生徒が自主的に活動するものとして、生徒に貴重な体験を与えてくれるものとして重要である。これらの行事での体験を通して、生徒は、集団の意義を理解しながら、自分が集団の中でどのような役割と責任があるのかを自覚し、集団とともに、生徒自らも向上していく。

研究協力校では、その取組として『韓国舞踊』を発表した。研究協力校は、在日韓国・朝鮮人の人たちが多く居住する地域を校区内にもっている。そこで、『韓国舞踊』を通じ、その国の文化を

知り、お互いに理解し合おうという国際理解の態度を培う目的のもとに実施された。

そこで、この体験を生かし道徳の時間とユニットを構成することにした。このユニットでのねらい、事前道徳、体験、事後道徳のそれぞれのねらいを表3-1にまとめた。

表3-1 ユニット「文化祭」のねらい

ユニット「文化祭」のねらい	
自分の国の文化を見つめ直し、自分の価値観にとらわれることなく、他の国にも目を向け、謙虚に学ぼうとする広い心をもつことの大切さを知り、進んで国際交流に取り組む態度を養う。	
各時間のねらい	
事前道徳	道徳『Stand Up』(内容項目4-10 国際理解) 自分の国の文化や習慣にとらわれることなく、他の国にも目を向けて、国際的視野にもとづいたものの見方や考え方を考える態度

	を養う。(価値の知的理解)
↓	他の国の文化に触れて理解することは大切であるという視点で、『韓国舞踊』の発表に臨ませたい。(体験への動機づけ)
体験	体験『文化祭』 他の国の文化に触れることで、自分の国の文化を尊重するように、その文化の素晴らしさに気づき、知ることの意義を理解する。(価値の感性的理解)
↓	外国の文化に触れて、感動した気持ちを大切に事後の道德の時間に臨ませたい。(価値の実感)
事後道德	道德『日本人の顔』(内容項目 4-10 国際理解) 偏見や差別をもたず、世界の国の人々と交流するために他の国の文化や習慣を知り、理解しようとする態度を養う。(価値の知的理解)

次に、事前道德、体験、事後道德の順に、それぞれの流れを説明することにする。

事前道德『Stand Up』の授業の展開

まず、英語が自分の生活の中に自然に入ってきていることを自分自身が気づいていないことを印象づけるために、作為的に自分たちの中に入ってきている教科としての「英語」についてのイメージを生徒に質問する。

その後、歌詞の中に英語が使われている『Stand Up』(24)の歌を、プリントされた歌詞を見ながら聴いてみる。

(資料)
『Stand Up』の歌詞の一部 Stand Up Come on DJ あのメロディーが聴きたいんだ Stand Up 届けてよ 僕達の Song from the radio Tell me どれだけの夜を越えてきたのだろう It's too much for me 一人悩んだりもしたけど It's all over now can't get no satisfaction この時間が大切 Oh I feel so free 手を伸ばし気持ちつかまえて I say Come On
『Stand Up』(立ち上がろう)の日本語訳の一部 DJ 立ち上がって頑張っていこう あのメロディーが聴きたいんだ 立ち上がって 届けてよ ラジオから僕達の歌を 教えてよ どれだけの夜を越えてきたのだろう もうたくさんだ 一人悩んだりもしたけど 今はもう乗り越えた 満ち足りている この時間が大切 自由を感じている 手を伸ばし気持ちつかまえて 頑張っていこう

『Stand Up』という曲は、生徒の関心が高い歌手が歌っており、この曲を資料として使うことに、生徒は興味を示す。そして、今までになかった道德の時間の導入に戸惑いを表しつつ、今後の展開に期待を寄せる。このことで、生徒の道德に対するイメージを変えて、自分の意見が言いやすい雰囲気をつくるのである。

そして、この歌に英語がたくさん使われていたことについての感想を聞く。今度は、歌詞の英語の部分を日本語に訳したものを見ながら、もう一度歌を聴く。なぜ、歌の中に英語が使われていることに抵抗を感じないのか、それどころかその方がいいと直感的に思うのはなぜか、生徒に考えさせる。感性で理解していたことを知的に理解することを促すのである。

そして、英語の歌詞のほかに、自分たちの生活の中に自然な形で受け入れられている外国の文化や習慣について思い出させ、外国の文化や習慣が自分たちの生活に何をもたらしてくれたか考えさせる。

最後に、これから国際交流が盛んになる社会で、自分たちがどのような態度で外国の文化や習慣に触れていけばいいのか考え、国際交流の知的理解を促す。

『韓国舞踊』の様子

『韓国舞踊』の舞台発表に臨んだ生徒は、1年生の女子生徒5名であった。1学期の終わりに選ばれたその5名は、夏休みも練習を重ね、2学期に入ってから、さらに練習も追い込みとなった。発表当日は、発表する5名以外の生徒は、舞台を鑑賞するという形であった。

事後道德『日本人の顔』の授業の展開

まず、外国の人が「日本」や「日本人」にどのような印象をもっているのか意見を出させ、導入とする。その後、資料『日本人の顔』(25)を読む。この資料は、ある日本人の少女が留学先で中国からきた少女と知り合いになり、お互いにそれまでもっていた日本人の顔のイメージ、中国人の顔のイメージと現実のギャップに驚いたという実話である。特に中国の少女の「だって、『日本人の目は細くて切れ上がっている』と中国で聞いていたから」という言葉と、日本の少女の「『目が細くて切れ上がっている』というのは、わたしにとっては『中国人』のイメージだったからです」のところに注目させ、お互いにそれぞれの国に対して、誤解していることに気づかせる。

さらに資料『世界の教科書にかかれた日本人の顔』(26)を見せ、そこに描かれているすべての顔が、

(資料)『日本人の顔』の一部(下線は筆者による)

留学生の仲間にスーという中国人の子がいます。

ある日、スーはわたしの顔をまじまじと見つめながら、

「ヨウコ、あなたの目は大きいわ。」

と不思議そうに言うのです。日本にいたころ、私の目が大きいなんて言われたことは一度もありませんでした。わたしがキョトンとしていると、スーは続けて、

「だって、『日本人の目は細くて切れ上がっている』と中国で聞いていたから。」

というのです。

わたしは、ふきだしてしまいました。スーが言った「目が細くて切れ上がっている」というのは、わたしにとっては、「中国人」のイメージだったからです。

目が細く吊り上り、頬骨と歯がでていう特徴をもっていることに気づかせ、外国の人が日本人の顔についてもっている固定したイメージを知らせる。自分たちの顔が勝手にイメージ化されていることに、感性的に不快感を感じさせるためである。

世界の教科書にかかれた日本人の顔を視覚を通して知らせるのは、生徒に少なからず衝撃を与えることで生徒の感性を刺激し、知的理解へと深めるためである。

(資料)『世界の教科書にかかれた日本人の顔』



次に、感性で捉えた不快感を知的に理解するために、これとは反対の立場を考えさせてみる。自分たちも外国や外国の人に偏見をもっていないか考えることで、自分たちが感じた不快感と同じ感情を外国の人も持っていることに気づかせ、それぞれの国の人たちが偏見や誤解をせず、正しく理解しあうためには、どういう態度が必要か知的

理解を求める。

(2) ユニット「文化祭」の分析と考察

事前道徳『Stand Up』

最初に教科書として学習する「英語」に対するイメージを聞くと、「単語が覚えられない」「英語を勉強し始めた頃はおもしろかったが、今はあまり楽しくない」などの抵抗を持っている生徒が多かった。しかし、歌詞の中に英語が入っている、馴染みのある『Stand Up』を聴いた生徒は、「日本語の歌詞の中に英語が使われていることをどう感じましたか」という感性を揺さぶる質問に対し、「この歌には英語の歌詞は入れてほしくない」「なんとも感じなかった」「英語の歌詞が入っていたほうがいい」「その他」の4つの選択肢のうち、英語の歌詞を違和感なく受け入れていると思われる「なんとも感じなかった」「英語の歌詞が入っていたほうがいい」を選ぶ生徒が全体の8割を超えていた。

つまり、生徒は、英語が自分たちの生活に入っていることを感性的に受け入れているのである。そして、「英語の歌詞が入ったことで日本の歌はよくなったか」という質問に対しては、ほとんどの生徒が「よくなった」と挙手をしていった。

また、生徒の日常と結びついた曲を資料として使ったことで、道徳の時間に興味を感じた様子であった。そして、次の教師の問いかけに期待する様子が伺え、価値を深める導入となったと思われる。

そこで、英語の入った歌以外に、外国の文化や習慣を自然な形で受け入れているものを考えさせると、ディズニー・ランドなどの遊興施設、サッカーや野球などのスポーツが挙げられ、外国の文化や習慣が日本に入ってくることに對して、肯定的な態度であった。

次に外国の文化や習慣を受け入れることに感性的理解を示している生徒に、知的理解を促す質問「他の国の文化や習慣を自分たちの生活に取り入れていくことによって、どんないいことがあると思いますか」をしてみた。そのワークシートの記入例を挙げてみる。

また、写真は、ワークシートに自分の意見を記入する様子であるが、ワークシートには、設問は表記せず、設問の番号と、意見を記入するスペースがとってあるだけである。これは、設問を表記したワークシートを使用すると、指導者の意図や、展開を先取りし、生徒の生の意見が出てきにくいことがあるからである。そのため、設問ごと

に、黒板に設問を板書し、(あるいは、カードに設問を書いたものをはる)生徒の興味・関心をひくように留意した。

写真 「ワークシートに記入する生徒の様子」



- (1)
- ・楽しい生活がおくれる。
 - ・出来なかったことが出来るようになる。
- (2)
- ・海外の文化を取り入れた方が、日本の文化が発達する。
 - ・日本のためになる。
 - ・新しい文化が発展する。
 - ・文化や生活の工夫の一つになる。
 - ・新しい文化が入ってくることで、文化が栄える。
- (3)
- ・他の国との交流が深まり、仲良くなる。

生徒の意見は、(1)のような、他の国の文化や習慣を取り入れることで自分自身が楽しくなるという意見、(2)のような、日本(自分の国)の文化が発展する視点や、(3)のような、国際交流の視点からの意見に分かれた。

生徒の発言や記述したものを総合的に判断すると、自分たちの生活に外国の習慣や文化が入ることを感性的に受け入れていた生徒が、道徳の時間を通して、他の人の意見を聞きながら、自己と対話し、外国の習慣や文化を受け入れる価値を知的に理解していることがわかる。

本時は、生徒が外国の文化を取り入れるという価値を知的に理解することがねらいであったので、そのねらいに一応達することができたが、他の国の文化や習慣が自分にとって役に立たなければ、他の国の文化や習慣を取り入れることは必要でないという考え方にならないか、危惧するところである。国際理解という知的理解の面からの深まりが必要であったと思われた。

『韓国舞踊』

『韓国舞踊』に選ばれた5名の女子生徒は、最初は気乗りしない生徒もいたそうだが、夏休みの練習を重ねる中で次第にその面白さに気づいて、

発表する楽しさを実感していったようである。写真は、発表当日の生徒の様子であるが、どの生徒も堂々と自信に満ちた踊りを見せてくれた。

写真 「韓国舞踊の舞台発表の様子」



一方、発表を鑑賞する側の1年生は、自分たちの仲間が踊る姿を食い入るように見ていた。生徒の感想文は、発表や発表者を賞賛するものがほとんどであったが、その中で発表された舞踊を他の国の文化との交流という視点から捉えていたものを紹介する。

- (1)
- ・違う国の文化が入っていいと思った。
 - ・日本の踊りじゃなくて、他の国の韓国の踊りをやってよかったと思う。
- (2)
- ・地域には、在日韓国・朝鮮の人がとても多いので、みんな仲良くするために、日本の文化も韓国の文化も大事にしていくことが大切だと思う。
- (3)
- ・日本以外の文化を知ることができた。また見てみたい。韓国のことを知らなかったのが、面白かった。また違う国のものも見てみたい。

これらの感想文を読むと、(1)の感想文のように、他の国の文化を知ることの喜びを表現したもの、(2)のように自分の住んでいる地域性を考慮し、韓国の人と同じ地域で生活していくうえで、お互いの文化を知ることの重要性を感じているもの、(3)のように、国際交流の視点から、韓国の文化だけでなくもっと他の国の文化も知りたいという思いのものなどがあつた。

いずれも、自分の身近にいる仲間が韓国舞踊を踊る姿を目の前で見るという体験により、感性的にその価値を受け入れている。さらにその感性で受け止めた価値が、事前学習での価値の気づきに支えられてより深い価値の自覚へと発展してい

る。ユニット「文化祭」における体験『韓国舞踊』のねらいである「他の国の文化に触れることで、自分の国の文化を尊重するように、その文化の素晴らしさに気づき、知ることの意義を理解する」を自覚しているものと思われる。

事後道徳『日本人の顔』

日本人の顔を誤解していた中国の人の話を資料から読んだり、実際に外国の教科書で日本人の顔だと紹介されている絵を見たりして、感性を刺激された生徒は「古臭い感じがする」「日本人の顔じゃないようだ」「現実と違う」「喜怒哀楽がなくて無表情だ(不思議だ・日本人には感情があるのに)」「外国の人が描いた日本人は本物じゃない」といったように、驚きと同時に不快感や憤りを感じ、価値の感性的理解を示した。

そこで、価値の知的理解を促すために、生徒にこれとは反対の立場、つまり、外国や外国の人に対して、今まで誤解していたことはないかと質問し考えさせた。すると、「外国の人は鼻が高い」「フランス人はみんなワインを飲む」「海外は犯罪が多い」などの意見が出て、そこで初めて、外国の人でも自分たちの感じた不快感や憤りと同じ感情を抱いているだろうということに気づき、感性的理解から知的理解への足がかりがついたようであった。

これらを踏まえ、お互いに誤解や偏見を持たないためにはどうすればいいか一人一人に考えさせた。生徒の意見を紹介する。

- ・ 話し合いをする。
- ・ 交流を深め、「出会い」の場を作る。
- ・ お互いのことを知り合う。
- ・ その国のことを本などでよく知る。
- ・ お互いにいろんな面を見せる。
- ・ 自分の国をもっとアピールする。
- ・ 他の国を知ろうと努力する。

これらの生徒の意見からもわかるように、お互いがよく理解しあうことの大切さを生徒は知的に理解し、これからの自分の生き方において、自分から他の国を知ろうと努力をすることや正しい知識を得ようとする意欲が高まったようであった。

ユニット「文化祭」の分析と考察

ユニット「文化祭」では、「自分の国の文化を見つめ直し、自分の価値観にとらわれることなく、他の国にも目を向け、謙虚に学ぼうとする広い心をもつことの大切さを知り、進んで国際交流に取り組む態度を養う」というねらいのもと、事前道徳『Stand Up』・体験『韓国舞踊』・事後道徳『日本人の顔』という流れでユニットを展開していっ

た。ただし、生徒には、それぞれの時間が一つのユニットして連続性をもっていることは伝えていない。展開が進むにつれて、それぞれが関連していることを感じる生徒はいるかもしれないが、ほとんどの生徒は自覚していないという状況であった。その中で生徒は、つながりは意識していないが、それぞれの時間の中で価値に気づき、自己の内面において深く自覚し、道徳的实践力へと発展させ始めていた。

ここで、『韓国舞踊』の発表者であったTさんのワークシートの記述や感想文からその成長を追ってみたい。

Tさん
事前道徳『Stand Up』より

(設問)他の国の文化や習慣を自分たちの生活に取り入れていくことによって、どんないいことがありますか。

今以上に楽しいことが増えるかもしれない。少しは役に立つかもしれない。

『韓国舞踊』の感想文より

「扇の舞」が覚えられたこと、みんなが韓国のことを一つでも知れたこと、みんなが「扇の舞」を見てすごいと思えたこと、韓国を尊敬できたことが文化祭で『韓国舞踊』をしてよかったこと。
舞台発表しての感想は、「恥ずかしかったけど、みんなの評判がよかったので良かった」です。

事後道徳『日本人の顔』より

(設問)私たちと外国の人がお互いに誤解しないために、どんなことをすればいいと思いますか。

その国にいったり、真実を見て、聞いてくる。外国の人と語り合う。

Tさんは、『韓国舞踊』を舞台で発表した5人の生徒の一人である。Tさんは事前道徳での価値の気づきを踏まえ、『韓国舞踊』を発表したことが大きな体験となつて、外国の文化にかかわることに意義を感じ、その価値を内面において深く自覚したようである。その感想からも分かるように、事前道徳で他の国の文化を取り入れることに対し、「今以上に楽しいことが増えるかもしれない。少しは役に立つかもしれない」という、主に、感性的理解による価値の気づきであったものが、『韓国舞踊』という体験を通し、今までの価値観が揺さぶられ、「みんなが韓国のことを一つでも知れたこと」「韓国を尊敬できたこと」とその意義を感じている。

さらに、事後道徳では、事前道徳と体験によって深められた価値観によって、自己の内面と対話することで、心に響き、自覚した価値を自分の生き方に反映させようとしている。このことは、事後道徳で、「私たちと外国の人がお互いに誤解しないために、どんなことをすればいいと思いますか」という設問に対し、「その国にいて、真実を見て、聞いてくる。外国の人と語り合う」というTさんの国際交流に対する前向きな姿勢からも伺える。

また、Tさんの内面では、事前道徳と事後道徳とによって、『韓国舞踊』がその場限りの体験で終わることなく、自分の将来の生き方につながる意味ある経験として、蓄積されたのであり、体験の経験化が図られているのではないだろうか。

すべての生徒が、Tさんのような成長を遂げたとは言いがたい。しかし、ワークシートから考察する限り、ユニットとして、体験と道徳の時間を結びつけ、体験を生かした道徳の時間を展開したことは、体験そのものを充実したものにしたこと、自己との対話によって、価値の深まりが促され、道徳の時間が心に響いた時間になり、「よりよく生きる」という道徳的実践力に対する意欲が表れていることにおいて、意味があったのではないかと考えられる。

第2節 ユニット「人権学習」

(1) ユニット「人権学習」のねらいと展開の流れ

人権学習は、日々の学校生活の中で折に触れて扱われるものであるが、中学校では12月の人権週間にあわせて、3年間を見据えて系統的・計画的に行われることが多い。そこでユニット「人権学習」では、この人権について真剣な態度で集中的に考える学習を中心に、その前後に道徳の時間を配し、「人権」の基盤としての「生命尊重」という道徳的価値が生徒一人一人の内面において深く自覚され、自分が生きていくうえでの指針になることをめざした。

表3-2で、ユニット「人権学習」のねらいと、事前道徳、体験、事後道徳のそれぞれのねらいをまとめた。

なお、この表の体験『人権学習』のところが、「価値の感性的理解」となっている。人権学習は、生徒にとって、学校生活のなかの体験の一つではあるが、その学習方法や学習形態を考えると、むしろ、「価値の知的理解」となる場合が多いと思われる。しかし、研究協力校においては、校外学習

表3-2 ユニット「人権学習」のねらい

ユニット「人権学習」のねらい 人権の基盤としての「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」態度を養う。	
各時間のねらい	
事前道徳	道徳『いのちの値段』(内容項目3-2生命尊重) 人の命は唯一無二であり、なにものにもかえることはできないことを理解し、自他の生命を尊重する態度を養う。(価値の知的理解)
↓	事前の道徳の授業で一人一人が自覚した人の命はかけがえのないものであるという道徳的価値を次に取り組み「人権学習」の基盤としたい。(体験への動機づけ)
体験	体験『人権学習』 生徒に人の命はかけがえのないものであるという道徳的価値を基盤に、そのかけがえのない命をどのような状況の下においても守ることが人権の尊重につながることを理解させる。(価値の感性的理解)
↓	事前の道徳の授業や人権学習の中で一貫して基盤にあった人の命はかけがえのないものであるという道徳的価値の自覚を深め、事後の道徳の時間に生かしていきたい。(価値の実感)
事後道徳	道徳『命を大切に』(内容項目3-2生命尊重) 自分を含むすべての人は、誰かの大切な人であることを理解し、すべての人の命を唯一無二でかけがえのないものとして尊重する態度を培う。(価値の知的理解)

の一環として、フィールドワークの要素が多分に含まれていたため、あえて「感性的理解」としたのである。

次に、事前道徳・体験・事後道徳の順に、それぞれの活動の流れを説明することにする。

事前道徳『いのちの値段』の授業の展開

『いのちの値段』の時間では、自分の一番大切だと思う人に値段をつけるという生徒にすれば、思ってもみなかったことを考えさせることで感性的を刺激し、人の命について、新たな視点で見つめ直して命の尊さを知的に理解することをねらいとした。

いきなり本題には入らず、自分の一番大切な人が誰であるのかを真剣に考える雰囲気を作るために、まず、『ロード』(27)という曲を聴く。この曲は自分の大切な人を突然失った悲しみを実話に基づいて歌った曲である。特に、大切な人を失った後に「何でもないような事が 幸せだったと思う 何でもない夜の事 二度とは戻れない夜」と続く歌詞に注目させる。そして、日常生活で気にかけて見過ごしているようなことに、目を向けさせ、自分のことを一番思ってくれる人は誰なのか、自

分の一番大切な人は誰なのかを考える導入とする。

(資料)『ロード』の歌詞の一部(下線は筆者による)

冬も終わりに近づき 借りたての部屋の中
突然闇に落とした 悪夢のような電話
病室のベットの上 まるで子供のように
微笑みを浮かべたまま 眠れる森の少女

ちょうど一年前に この道を通った夜
あの時と同じように 雪がちらついている

何でもないような事が 幸せだったと思う
何でもない夜の事 二度とは戻れない夜

次に、実際に生徒に自分が一番大切だと思う人を頭に思い浮かべさせる。ここでしっかりと大切な人を浮かべることが出来るかが、以後の授業の深まりに影響を与えると考えられる。

次に、生徒の感性を刺激し、既存の「生命尊重」の価値を揺さぶるために、その大切な人に値段をつけるといくらになるかという衝撃的な質問を生徒にぶつける。そして、人の命に値段をつけるという生徒の常識では理解しがたい質問に反発する感情を生かし、「人の命はかけがえのないものである」という価値を感性的に理解させる。

さらに、人の命はモノではないことを実感させるために、人体をモノに換算したときの値段(5000円)(28)を生徒に伝える。

(資料)人体を原料にしてできるモノ

- ・ 脂肪...せっけん7個分
 - ・ 炭素...鉛筆の芯9000本分
 - ・ リン...マッチの頭2200個分
- 以上のモノをお金に換算すると5000円

写真 「黑板にはられたカード」



このとき、人体を原料にしてできるモノとその数を、カードに分けて書いておき、生徒と指導者とが、会話をやり取りしながらカードを順次黒板

にはっていく。そうすることで、生徒の興味が引き出され、最後の5000円という値段が印象深くなるためである。写真は、カードを黒板にはる様子である。そして、なぜ5000円という値段では自分が納得しないのかをじっくりと考え、生命の尊さの感性的理解から知的理解へと促す。

最後に、2種類の新聞記事を読む。一つは、いじめで自殺をした中学生の記事(29)『「いじめ」で中3自殺』、もう一つは、飛行機事故で父親を失った小学生の記事(30)『お父さんが小さなつぼに入ってしまった。ぼくはとてもなくやしい』である。

この2種類の新聞記事は、防ぐことのできる「死」と、防ぐことの出来ない「死」という両極端の内容である。後者の記事のなかで、小学生の作文が紹介されているが、その一文である「い品はほとんど帰ってきたけど、お父さんは帰ってこない。ぼくはすごくくやしい」のところに注目させ、防ぐことのできない「死」による、残された家族の悲しみをしっかりと考えさせ、自ら命を絶つことへの警鐘としたい。

(資料)『お父さんが小さなつぼに入ってしまった。ぼくはとてもなくやしい』の作文から一部抜粋(下線は筆者による)

お父さんじまんのアタッシュケースも見つかった。このあけかたは、ぼくとお父さんとおねえちゃんしかしらないものだったのにそのひみつのぶんがなかった。おとうさんのいき入れもみつかった。その中には、ぼくとおねえちゃんのしゃしんがあった。い品はほとんど帰ってきたけどお父さんは帰ってこない。ぼくはすごくくやしい。

そして、これらの記事から、さらに生徒の「生命尊重」という価値の知的理解を深める。

『人権学習』の様子

研究の依頼をした中学校では、フィールドワークで、『ピースおおさか』と『リパティおおさか』を訪問し、そこで、ワークシートにしたがって「被差別部落と身分」「性と差別」「在日コリアン」「沖縄・アイヌ民族」「身体文化と環境」「戦争」の分野について学習をした。校外学習後、グループで人権について自分たちが調べたことや、考えたことなどを冊子という形でまとめた。

事後道徳『命を大切に』の授業の展開

最初に導入として、自分が親(家の人)にとって大切な存在であることを感性的に捉えさせるために、「家の人自分が育てるために、今までどのようなことをしてくれたのか」を考えさせる。また、親にとって自分の子どもの命は自分の命と同じくらい重大なことであることを理解するために、「自分がすることで家の人悲しむことは何

か」を考えさせる。

次に、フォトランゲージという参加型の手法を用い、寝たきりになっている自分の娘に、おかゆを食べさせるおばあさんの写真の上半分を生徒に見せ、おばあさんが何をしているのかを想像させた後、写真の全体を見せ、写真の説明をする。(31)

ここでフォトランゲージという手法を用いるのは、生徒が写真という斬新な資料にひきつけられ、今までの道徳の時間に対する固定したイメージに拘束されることなく、自由な発想で思ったことを発言する雰囲気期待してのことである。

次に、おばあさんが、自分がガンのために入院する朝まで娘の介護をするという行為を、なぜできるのかを考えさせることで、写真を見て、感性的に親の愛を捉えていた生徒の理解は、知的なものへ発展する。

そして、自分の命の大切さを理解した後、自分以外のすべての人の命もかけがえのないものであることを考える。まず、自分の隣に座っている人、自分と同じ班の人、クラスの人と視野を広げること、自分以外の人もまた、誰かにとって大切な存在であることに気づかせる。そして、自分の命を大切にするように、自分以外の人の命も大切にしなければならないことを実感させる。また、命を大切にすることが具体的にどのようなことをさすのかを考えるために、自分の命や他の人の命を大切にしない行為にはどんな行為があるのか、考えさせ、価値の知的理解を深める。

最後に、冗談のつもりでしてしまった行為が、人の命にかかわる事件となり、多くの人を悲しませることになった資料『冗談のつもりが』を読む。

この資料は、実話に基づく自作資料であるが、学校生活で日常的に起こりうる話であり、生徒は、怪我をさせた生徒、怪我をした生徒のどちらの立場も、自分のこととして実感できると考えられる。そのため、どちらの立場の生徒にも、彼らを心配する親がいることは、無理なく理解できるであろう。そこで、資料のなかでも、とくに、「誰だって、誰かのかけがえのない大切な人なのですから」という箇所注目させ、「自他の生命尊重」の「他」の部分をしっかりとおさえ、価値の知的理解の定着をめざす。

(資料)『冗談のつもりが』の一部(下線は筆者による)

ある日の休み時間のできごとです。A君が友達と鬼ごっこをして走っていました。それを見ていたB君とC君は、冗談のつもりで、走ってくるA君の前に自分の足を出して、A君を転倒させました。A君はおなかから地面にたたきつけられました。

(略)

もう少し病院にるのが遅ければ、命もあぶなかった。

(略)

死の危険にさらされたA君はお父さんお母さんにとって、かけがえのない大切な存在です。A君のお父さんやお母さんは、耐えられない悲しい思いをされたことでしょう。そして、B君やC君も彼らのお父さんやお母さんにとって、かけがえのない大切な子どもです。B君やC君のお父さんやお母さんは、A君の回復を祈りながら、この事故によって、自分の子どもがどんな立場に立たされるのか、回りからどんなことをいわれるのか、そして、自分の子どもはこれらのことを、どうやって乗り越えていくのかということも心配しておられるのです。

冗談のつもりでやったことが、これだけ多くの人を悲しませてしまいました。私は、この事故以来、人の命の尊さを、今まで以上に強く感じるようになりました。

みなさんも、命を大切にしてください。そして、自分の命を大切にするように、自分以外のすべての人の命も大切にしてください。誰だって、誰かのかけがえのない大切な人なのですから。

(2) ユニット「人権学習」の分析と考察

ここでは、ユニット「人権学習」のそれぞれの実証授業を時間を追って、分析し考察することで、その有効性と今後の課題を述べることにする。

事前道徳『いのちの値段』

最初に聴かせた『ロード』は、生徒の心に響くものがあつたようで歌詞を追いながら真剣に聴き入っていた。自分の一番大切な人を思い浮かべる雰囲気ができたと思われる。

そこで、生徒に自分にとって一番大切な人を一人だけ頭に浮かべさせると、「お母さん」や「お父さん」などの家族、友人などを思い浮かべていた。指導者が「お母さん」と答えたある生徒に理由を尋ねると、「お母さんは自分を生んでくれたし、お母さんがいなかったら、自分は生まれてこなかったから」と答えた。すると、一番大切な人と言われて、ふと頭に浮かんだ人が母親であったことから、あまり理由を考えずに「お母さん」とワークシートに記入した生徒たちが、自分の心をうまく表現したこの理由を聞き、大きくうなずいていた。

その後の「その大切な人に値段をつけるとしたらいくらですか」という生徒の価値観を揺さぶる質問には、戸惑いを隠せない様子であったが、あえて値段をつけるように指示すると、自分の知っている限りの大きな金額を書いたり、無限大を表す「∞」のマークを書いたり、自分の命と引き換

えにと書いたりしていた。生徒は、そう書くことによって、自分の大切な人に値段をつけるという行為を否定する気持ちを表していたように思われる。中には、「その人たちに値段なんてつけられないと思う。人間の温かい心、笑顔すべてが世界でたった一つの宝物だから」と書いている生徒もいた。

次に、人間をモノとしてお金に換算した場合の値段(5000円)を指導者から聞くと、生徒は直感的に「安い」「安すぎる」と不満の声を上げた。

そこでなぜ安いと感じるのか、5000円という金額をどう思うのかについて考えさせ、価値の知的理解を求めた。その生徒の意見を紹介する。

- ・ 人には命があるから、お金にはできない。
- ・ 大体、人を原料にしてモノを作ること自体が変だと思う。
- ・ どんなに安くても高くても、人に値段をつけて買ったり、売ったりするのはだめだと思う。
- ・ 命はお金では買えないし、大体人間はお金には代えられない。
- ・ この世界中のお金を集めても絶対足りない。
- ・ お金ですむ問題じゃない。
- ・ 命と金は価値が違い過ぎる。
- ・ 人にはそれぞれ個性があるし、個性は他の人には真似できないし、世界で1人しかいないのに5000円は安すぎる。

今までの自分の価値観が命に値段をつけるという行為で揺さぶられた生徒は、その理由を自己の内面で自分と対話しながら考えていった。そして、人の命がお金では買えないこと、命は他のモノとは比べることができない次元のものであることを知的に理解していったと思われる。

最後に防ぐことのできる「死」と、防ぐことのできない「死」を取り上げた新聞記事を読んだところ、生徒の「生命尊重」という価値に対する知的理解は更に深まったようであった。生徒の感想の中から、いくつかを紹介することにする。

(1)

- ・ 道徳の勉強をして、「命」って、とても大切なものだということがよく分かった。人間の命は、お金にも代えられないものだし、その命がなくなると、たくさんの人たちを苦しめることになる。私にとって、大切な人、それは世界中の人たちです。
- ・ 過去に出会った人たちも未来に出会う人たちも大好きです。みんな同じ人間だから。みんな「生きているから」。でも、それをふみにじる人たちのことは許せません。「命」という宝物をこれからも、大切に大切におもっていきます。
- ・ 命は簡単に失うことができるが、思い出は計り知れないものだから、だから、もっと命を強く、たくましくしてほしい。
- ・ 一人一人の大切さや、大切な人のかけがえのなさを知った。

(2)

- ・ 人の命がすごく重いということが改めて分かりました。人が死ぬということは、周りの人がすごく悲しむということに気づいた。

(3)

- ・ 人の命は、はかないものだと思った。今、生きていることを大切に思わないといけな。
- ・ 何気なくすごしている、この時間の一秒一秒がものすごく大切なんだと思った。
- ・ 人の命はすごく尊いということがわかった。亡くなったときに、ああすればよかったと後悔したくないから、生きている間に、精一杯、その人のためになることをやりたいと思った。

(4)

- ・ 大切な人をよく考えて、やっぱり大切な人は、親だとわかった。だって、親がいなかったら、私はいなかったし。ここまで大きくなれたり、色々教えてくれたりしたのも親だから。これからは、もっと、お母さんを大切にしたいと思う。

これらの生徒の感想文を読んでもみると、(1)のように、命の大切さを痛感したもの、(2)のように、命を失うことは、個人の問題ではなく、その人を大切に思っている人たちをも巻き込むものであると感じたもの、(3)のように命の大切さを知ったうえで、生きている「今」を大切にしようと思ったもの、(4)のように尊い命を与えてくれた親に感謝の気持ちを表しているものなどがあつた。

いずれの感想文からも、本時の「人の命は唯一無二であり、なにものにもかえることはできないことを理解し、自他の生命を尊重する態度を養う」というねらいが感性的理解から知的理解へ発展していることが読み取れる。ただし、「自他の生命」の「他」の部分についての価値の自覚はあまり感じられなかった。この部分については、事後道徳で深める必要があると感じた。

体験『人権学習』

さまざまな人権問題について、学習する中で、事前道徳で自覚した価値観が生かされていると思われる生徒作文をいくつか紹介する。

(1)

- ・ 今回の人権学習で、私は多くのことを学びました。勉強だけでなく、人の気持ちも分かる人になりたいです。
- ・ 今まで、困っている人を見ても見て見ぬふりをすることが多かったけど、これからは、困っている人がいたら、できる限り助けようと思う。それが、今、自分にできることだと思う。あと、人の傷つくことを言わないことと、人の気持ちをよく考えられる人になろうと思う。
- ・ ちょっと、冗談で言ったことでも、相手はすごく傷つくかもしれないから、もっと考えてものを言うようにしなくちゃいけない。
- ・ 自分たちに、何ができるかよくわからないけど、自分は今まで、差別とかしてきたことがいっぱいあるから、これからは差別とか絶対にしないようにしようと思いました。やっぱり自分も差別とかされたら絶対いやだし、さびしいし、悲しいし、むかつくし。あと、自分じゃなくて、差別をしている人

や、されている人を見るのもいやだから、みんな差別とかするのをやめてほしいなあと思いました。

(2)

- ・私は、こんな幸せな時代に生まれたのだから、精一杯親孝行しようと思う。なにか、家族って温かいと思った。
- ・とりあえず、差別せぬよう、親不幸者にならぬようがんばる。
- ・やっぱり、親ってというのは、かけがえのない大切な人になって、あらためて思った。

(3)

- ・私は本当にこの時代に生まれ、平和に暮らせることを幸せに思います。
- ・あとは世界中が、平和になってほしいです。絶対。
- ・戦争とかしてもなにも残らないし、みんなが悲しんだりするだけだから、みんなが楽しく過ごせて、幸せに暮らせるような世界になってほしいなあと思っていました。そうなったら、言葉の壁などもなくなると思います。
- ・戦争は人が死ぬだけでなく、人と人との交流をもこわしてしまうものだと思った。

これらの感想文をみると、(1)のように、自分の周りにいる人を尊重しようという気持ちの表れているもの、(2)のように自分を生んで、大切に育ててくれている親に感謝しているもの、(3)のように、人類の平和という大きな視点で捉えているものがあつた。いずれも、生命尊重の価値観が基盤にあると思われる内容であつた。特に、(2)の親に対する感謝が感じられる感想文は、事前道徳で自覚した価値観が大きく影響しているのではないだろうか。

事後道徳『命を大切に』

はじめに親の愛情を感性で理解させることがねらいである設問「家の人があなただを育てるために、どのようなことをしてくれましたか。」を生徒に投げかけた。すると、「自分に命をくれた」に始まり、「おむつをかえてくれた」「言葉を教えてくれた」「食事を作ってくれた」など、書ききれないという声と共に、生徒は、親が今まで自分にしてくれたことの数々を思い出していった。ある生徒が「怒ってくれた」と言うと、他の生徒はその言葉に驚きと同時に、納得の気持ちがあつたらしく、「それいいな」とつぶやく生徒もいた。日頃、親が自分のことを怒ることに煩わしさを感じている生徒が、それは、自分のためであることを自覚した様子だつた。

同じく生徒の感性的理解を促す次の設問「あなたがすることで、家の人悲しむことには、どのようなものがありますか」を行った。ここでは、「家出」「自殺」「人を傷つける」「犯罪」などが挙げられたが、指導者が「その中で、親が一番悲しむのはどれですか」と問いかけると、「自殺」という返答が瞬時に、複数の生徒の口から挙げられた。親が一番悲しむことは子どもの命にかかわること

であるということが当然であるという雰囲気だつた。

次に、ガンにおかされたおばあさんが、寝たきりの娘に食事を与えている写真をみた生徒に「おばあさんがとつた行為を、どう思いますか」という感性に訴える設問を投げかけたところ、「素晴らしい行為だ」「二人ともが幸せに暮らせる方法はないのか」「おばあさんは、娘のためにも、もっと自分の身体を大切にしないでならない」の3通りの意見に分かれた。いずれも、親の子どもに対する無償の愛を感性的に理解している内容であつた。ワークシートから、意見を紹介する。

- ・おばあさんは、娘のことをとても大切にしている。自分の子どもがどんな病気であろうと、親は子どもを守るんだと思った。
- ・自分の命を縮めてまで、世話をするのは、よっぽど大切な人でないとできないと思う。
- ・親ってすごいなあと思う。親は自分の子どものことがとても大事なんだなあ。
- ・自分が生んだ子どもだからできるんだと思う。自分の子どもじゃなかったら、そこまで世話をすることはできないだろうなと思った。だから、親にとって、子どもはかけがえのない存在なんだと思った。

写真 「写真を拡大し、黒板にはった様子」



また、写真 は、おばあさんの写真を拡大し、黒板にはった様子である。写真を拡大し、生徒に提示したのは、生徒の印象を強めることで、興味・関心を高め、指導者の問いかけに集中して考えることができるためであつたが、生徒の反応は、予想通りであつた。黒板いっぱいにはられた写真を食い入るように見ながら、おばあさんが何をしているところか、口々に、発言していた。そして、写真の全体を見た後も、その姿に感動している様子が見られた。

これらの生徒の感想をお互いに聞きあいながら、指導者からのメッセージである『子どもは親にとってかけがえのない大切な存在です。...(略)...あなたの命はあなただけのものではなく、あなたを愛してくれる人にとっても、大切なものなの

です』を聞いた生徒は、知的理解により、命の尊さを今までより深く自覚したようであった。

次に、生徒は自分の周りに座っているクラスメートの顔を見るように指示された後、『ここにいるすべての人は、誰かにとって大切な人だ』というメッセージを聞くと、今まで、すべての人の命を大切にしようと言われてきたことが、実感としてとらえられたようであった。その後の資料『冗談のつもりで』を読んだ後の感想文では、自他の生命尊重が生徒の内面で自覚されたことが表れていた。その中のいくつかを紹介する。

- ・今日の道徳で、私は誰かを必要としているのだったら、私も誰かにとって、必要な人間なのかなってあらためて思いました。この世に生まれたこと、そして生きているということが、やっぱり意味があるんだとおもう。やっぱり、自分勝手に生きているのって、だめだと思う。それに、自分勝手に死ぬことも許されないと考えた。
- ・今日の道徳は『命を大切に』という題名だった。命が大切なことは誰だってわかっている。けど、この授業をやって、もっともっと、命の大切さがわかったと思う。命は一人に一つある。その命が終わったら、それで人生も終わる。それだけ、命が大切なのだと思った。簡単に死にたいと思うのはいけない。
- ・僕はよく冗談でサッカーのパスを失敗したときや、点数が低いときに「死のかな」と言います。でも、今日の道徳で、その言葉がどんなにあほなものかわかった。死ぬことで、他の人が喜んだり、笑ったりする人なんかいない。死ぬことで得られるのは、悲しみです。それも、とても重い重い悲しみです。あと、僕は、友達などに、むやみに「死ね」と言わないようにします。一人一人に対して大切に思う人がいる。それを思えば簡単に「死ぬ」とか「死ね」とかはいえないはずです。
- ・自分にとって大切だと思わない人でも、誰かにとっては大切なのかも...なんてことは今まで一度も考えたことがないと思う。けれど、その通りだと思う。ということは、大切じゃない人は、この世にはいないんだな。
- ・命は本当に大切なんだと思いました。親に注意されるのが、正直「うるさいな」とか思っていたけれど、その注意は私の命のことを思って言ってくれるのだと、今日の授業で思いました。私が悲しむことは、親も同じくらい悲しんでくれるんだらうなと思いました。私の命は親の宝物なんだらうなと思いました。

ほとんどの感想文から、自分の命の尊さから自分以外のすべての人の命の尊さに視点が発展していることがわかる。本時の「自分を含むすべての人は、誰かの大切な人であることを理解し、すべての人の命を唯一無二でかけがえのないものとして尊重する態度を培う」というねらいが知的理解のもと、達成していることがわかると思われる。今まで感性的理解をしていた「自他の生命を尊重する」という価値観が、道徳の時間を通じて揺さぶられ、新たな視点で生命の尊さを知的に理解し、これからの自分の生き方に反映していこうとする

様子がわかる。生徒は、「生命尊重」という道徳的価値を自己の内面で深く自覚し、実践力へと発展させようとしている。

ユニット「人権学習」の分析と考察

ユニット「人権学習」では、「人権の基盤にある『生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する』態度を養う」というねらいのもとに実施した。事前道徳、人権学習、事後道徳というそれぞれの時間の流れのなかで、お互いの時間がどのように関連をもち、ユニットとしての有効性があったのかを、生徒Hさんのワークシートで分析したいと思う。

事前道徳『いのちの値段』でHさんは、一番大切な人を「お母さん」と考えた。しかし、そのお母さんに値段をつけるという行為を指示されたHさんは、自分のいままでもっていた価値観を揺さぶられ、戸惑っている。それが、値段をつけられずに、「（無限大）」のマークを書いたことで分かる。そして、人に値段をつけることを感性で否定したHさんは、5000円という人をモノに換算した値段を聞き、「いろいろなことを教えてくれたり、あたしのためになるようにがんばってくれるから。お金には代えられない」と感性で受け止めていた価値を知的に理解し始めている。

そして、Hさんは、校外学習のフィールドワークで人権にかかわる問題に触れ、そのなかでも、特に、戦争で離れ離れになった親子の問題に関心を持ち、事前道徳での価値の気づきのもとに、親の命を大切にしようとする気持ちを抱いている。

さらに、事後道徳『命を大切に』では事前道徳と体験による連続した「生命尊重」の思考が、価値の知的理解により深まっている。その価値は自分の命にとどまらず、感想文の中の「どんな人でも、その人をとても大切に思っている人がきっといるんだと感じた」でわかるように、自分以外のすべての人に向けられている。さらに、「だから、けがをさせたり、ひどいことを言ったりとか、絶対にしてはいけないんだと思った。」でわかるように、道徳の時間が心に響いたことにより、自覚した価値をこれからの自分の生き方に反映させようとする意欲や、道徳的実践力へと発展しつつあることが読み取れる。

また、「人権学習」という体験は、道徳の時間に価値を内面において深く自覚することに生かされているのと同時に、それ自体も事前道徳と事後道徳によって、一層の深まりをもち、充実した内容となり、自己の内面に意味ある経験として蓄積されているのである。

Hさん

事前道徳『いのちの値段』より

(設問)あなたが自分にとって、一番大切だという人を一人だけ書いてください。

お母さん

(設問)その大切な人に値段をつけるとしたら、いくらですか。

(無限)

(設問)先生から聞いた値段を聞いてどう思いますか。

やっぱり、5000円とか値段の問題じゃないと思う。いろいろなことを教えてくれたり、あたしのためになるようにがんばってくれるから、お金には、代えられない

(感想)私が生きている間に、お母さんはいつか死んでしまうだろうから、どうしようと思う。とにかく、親孝行したい。

『人権学習』の感想分より(抜粋)

やっぱり、お父さんとお母さんを大切にしなければならぬと思いました。親って、やっぱり大きい存在なんだと感じた。

事後道徳『命を大切に』より

(設問)おばあさんがとった行為を、どう思いますか。

自分がぼろぼろになっても、娘のことを守っていて、母親ってすごいんだと思った。娘さんは、障害をもっているから、会話もできないし、一緒に歩いたりできないし、自分がいっぱい世話をしてやらなければならないけど、それでも母としてとても深く愛しているのだと思った。それで、自分が守らなければいけないという気持ちがあると思う。

(感想)自分の命も大切だし、周りのどの人の命も大切なんだなと思った。だから、けがをさせたり、ひどいことを言ったりとか絶対にしてはいけないんだと思った。どんな人でも、その人をとても大切に思っている人がきっといるんだと感じた。

以上のように、ユニット「人権学習」では、生徒の中で生命尊重の思考が連続し、価値の感性的理解と知的理解の双方向の働きによって、時間を追うごとに、その自覚が深まった。そして、道徳の時間そのものと道徳の時間へのアプローチの工夫により、道徳の時間が心に残り、道徳の時間に

心を揺さぶられ、動き、自己の内面との対話によって、心に響く時間になったことで、「よりよく生きる力」という道徳的实践力につながっていくのである。

しかし、ユニット「文化祭」と同様に、生徒に、ユニットとして学習していることを伝えていないために、それぞれの時間を単独に捉えていた生徒も多くいたと思われる。生徒にユニットとしての連続性を伝えなかったのは、事前に指導者の意図がわかっていることにより、生徒の自由な発想を遮るのではないかと危惧したからである。道徳の時間を楽しめないと捉えている生徒は、その理由にその時間の展開がわかってしまうことを挙げている。つまり、指導者が生徒に求めているものが、わかってしまうとき、生徒はその時間に魅力を感じなくなるのではないかと考え、あえて、ユニットを意識させなかった。そのなかで、生徒が自ら何らかのつながりを感じ取っていけば、それでいいのではないかと考えたのである。

しかし、実証授業を通じて感じたのは、それぞれの時間において、生徒が楽しい、ためになったと思うのは、ユニットの意識の有無ではないのではないかとということである。指導者の意図がわかっても、その時間に生徒にとって、新たな発見や、心を揺さぶるものがあつたなら、生徒は充実した時間だと捉えるのではないだろうか。

第1章第1節(2)「道徳の時間の現状」のところで、タテマエの道徳の時間について触れたが、このタテマエの道徳の時間とは、心を動かされるような新たな気づきのないままの授業のことである。つまり、結論がわかっていたとしても、生徒の心を揺さぶるものがあれば、むしろ、ユニットとしてのねらいを明確にし、的を絞った授業にしていくことで、生徒の価値の自覚が、一層深まることもあるだろうと思われる。

(24)倉木麻衣『Perfect Crime』GIZA studio
SRCL4768 2001

(25)『ひらがなタイムズ』ヤック企画 1995

(26)別技篤彦『理解されないニッポン』祥伝社 1988
p.177

(27)虎舞竜『ロード』日本クラウン MEDR10032 1993

(28)一円玉倶楽部編『MONEY無用の雑学知識』KKベストセラーズ p.16

(29)『読売新聞』1985/9/27付

(30)『毎日新聞』1985/9/3付

(31)大江浩光『今を生きる人々に学ぶ「生きる力」を育てる道徳授業』明治図書 1999 p.27

おわりに

本研究では、道徳の時間そのものの改善とともに、体験を道徳の時間に生かすというアプローチの工夫を組み入れて、道徳の時間を心に響く時間とすることを試みた。その結果、道徳の時間に体験を生かした有効性は、次の3点に要約できるのではないかと思われる。

まず第1に、ユニットで、事前道徳、体験、事後道徳という流れを踏んだことで、生徒の思考に連続性が生まれ、価値の自覚が深められたことである。事前道徳で自覚した価値が、体験という実践の場で、感性的理解によってさらに深まり、一人一人の生徒が深めた価値を事後道徳で、補充、深化、統合することで、自分の生き方に反映しようとする意欲や、態度が身についたことである。

第2には、生徒に共有する学校生活の身近な体験を生かしたことで、生徒相互の意見交換において、深まりと広がり生まれ、生徒が自己の内面で自分自身と深く対話することができたことである。自己の内面で深く対話した価値は、心に響く道徳の時間には、欠かすことのできない要素である。

第3としては、体験がその場限りで終わることなく、道徳の時間を通じて、意味ある経験として生徒のうちに蓄積されたことである。生徒が自分の人生をよりよく生きていこうとするとき、経験化された体験は、その基盤となるはずである。

以上のような体験を生かした道徳の時間の有効性のもとに、生徒は、道徳の時間を心に響くものとして受け止め、道徳的価値の自覚を深め、それを自分の生き方に反映させようとする意欲や態度を身につけたことは授業中の発言やワークシートの記述などから実証されている。

また、一方で、今後の課題もみえてきた。今回の研究では、道徳の時間へのアプローチの工夫の一つとして、体験を生かし、道徳の時間を自分のこととしてとらえ、自己の内面と深く対話することで、価値の自覚を深めることをねらいとした。しかし、今回、取り上げた体験は、学校教育のなかでも、特別活動の領域の体験との結びつきが多く、その他の領域や時間、日常生活での体験との結びつきが少なかった。

そのため、第2章第2節(2)「体験と内容項目との関連」で述べたように、「愛国心」や「国際理解」などの内容項目が体験と結びつきにくく、1年間の学習プログラムを開発する際に、ねらいに偏りが生じた。

今後、道徳の時間の発展と、より一層の充実を図るためには、道徳の時間と他の教育活動との関連をどのように図っていくかを研究することが重要ではないかと思われる。

とくに、総合的な学習の時間では、「自己の生き方を考えることができるようにすること」がねらいとして明示されており、またそこで行なわれる学習活動の例示としては、「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題など」学校の実態に応じた学習活動が幅広く行なえるようになっている。つまり、総合的な学習の時間においては、そのねらいにおいても、そのねらいに迫るための学習活動においても、道徳教育にかかわる学習を中心に展開することが可能となっているのである。

そして、この総合的な学習の時間と関連をもった道徳の時間は、これらの学習活動での貴重な体験を、その場限りのものにせず、生徒が自己課題をもって取り組み、生徒のうちに蓄積させていくことにおいても、担う役割は大きいと思われる。

また、最近、小学校を中心に広がりつつある「総合単元的な道徳学習」、つまり、生徒の課題意識を重視し、道徳の時間を核として、各教科・特別活動・総合的な学習の時間などの教育活動との関連を密にした道徳学習も、今後の道徳教育の発展にとって、大きな力になるとと思われる。

今回、「道徳」の研究の機会を与えられた。文献を読んだり、道徳の授業を見せていただいたりした中で、自分の反省を含め、痛感したことは、道徳の時間での指導者の姿勢である。つまり、指導者が生徒と真剣に向き合うことの大切さである。指導者自身もまた、不安や悩みを抱え、葛藤を続けている一人の人間である。指導者は、人生の先輩として、生徒に今までの自分の生き方からアドバイスすることはできても、これこそが「よりよい生き方」であるとは、言い切ることができない。道徳の時間は、そういう指導者と生徒が、ともに自分の人生を「よりよく生きる」ことをめざして、真剣に、悩み、考えていく時間とならなければならないと感じた。そして、こういった指導者の姿勢もまた、道徳の時間の改善の大きな要素ではないかと思った。生徒と共鳴しあい、共に歩む心を忘れないようにしたい。

最後に、本研究をすすめるにあたり、ご協力をいただいた陶化中学校ならびに久世中学校の教職員の方々に、心から感謝し、ここにその意を記しておきたい。